

# 「仮名手本忠臣蔵」を読む

三 浦 良

2014 年 2 月 10 日

# 目 次

## 第1章 研究の背景と目的

- (1) 忠臣蔵の高い人気と激しい毀誉褒貶・・・・・・・・・・2
- (2) 「仮名手本忠臣蔵」と「忠臣蔵」・・・・・・・・・・4
- (3) 検討の視点・・・・・・・・・・7
- (参考)「仮名手本忠臣蔵」あらすじ・・・・・・・・・・9

## 第2章 忠臣蔵は御霊信仰で読めるか～丸谷諏訪論争

- (1) 怨霊を慰撫する忠臣義士・・・・・・・・・・14
- (2) 御霊信仰について・・・・・・・・・・15
- (3) 御霊信仰を動機にした祝祭としての忠臣蔵・・・・・・・・16
- (4) 国文学者の反論・・・・・・・・・・17

## 第3章 赤穂事件と「仮名手本忠臣蔵」に先行した戯曲作品

- (1) 初めは関心と呼ばなかった赤穂事件・・・・・・・・・・19
- (2) 吉良の首・・・・・・・・・・20
- (3) 「仮名手本忠臣蔵」の前に赤穂事件を扱った浄瑠璃・・・・・・・・23
- (4) 「世界定め」と「趣向」・・・・・・・・・・26

## 第4章 赤穂事件を「太平記」の世界で劇化

- (1) 「世界」としての太平記・・・・・・・・・・28
- (2) 「異形の王権」としての後醍醐天皇と建武の新政・・・・・・・・31
- (3) 太平記の世界は婆沙羅の世界・・・・・・・・・・34
- (4) 「理尽抄」と「太平記読み」・・・・・・・・・・38

## 第5章 忠臣蔵とは何か

- (1) 趣向を競う時代物—忠臣蔵の事の始まりは「邪恋」・・・・・・・・41
- (2) 揺れ動く「武士道」が討入動機か・・・・・・・・・・43
- (3) 高師直は南北朝時代のバサラ・・・・・・・・・・46
- (4) 忠臣蔵を楽しくさせる多彩な義士たち・・・・・・・・・・49

## 第6章 忠臣蔵と「武士道」

- (1) 「武士道」の変遷・・・・・・・・・・52
- (2) 忠臣蔵と「武士道」・・・・・・・・・・56

## 第7章 結語

- (1) 忠孝倫理の変遷・・・・・・・・・・60
- (2) サムライを典型的日本人像にした忠臣蔵・・・・・・・・・・61

## 第1章 研究の背景と目的

### (1) 忠臣蔵の高い人気と激しい毀誉褒貶

忠臣蔵は作られた江戸時代から高い人気を得ている。「歌舞伎年表」によれば、初演の寛延2年（1749年）の江戸の中村座の初演から徳川幕府が崩壊した慶応2年（1867年）までの118年間に202回公演されたというのだから、毎年2回程度公演されたことになる<sup>1</sup>。歌舞伎の興行主たちは、忠臣蔵を漢方の気付け薬「独参湯」のような効き目があるとして、歌舞伎が落ち目の時でも忠臣蔵をうてばきつと盛り返すと言ってきた。また、口の悪い観客には「冬は義士、夏はお化けで飯を食い」（初代一龍斎貞山）と言う人もいたほどだった。しかし、忠臣蔵については時代により評価が異なり、毀誉褒貶が著しい。

討入直後の江戸・元禄時代では、浪士の処分をめぐって幕府における儒学者の意見は「法の順守か、義の尊重か」をめぐり二つに割れた。林大学が浪士助命論を主張したことに対し、徂徠は切腹論を主張した。徂徠の切腹論は、浪士が主君のために復讐するのはサムライの恥をそそぐもので、自分を律する義にかなう行為と見ることができる。しかしそれは浪士の間だけに通用するもので、私的な論理である。浅野は殿中で事を起こして処罰された、吉良を仇とし公儀の許しも得ずに騒動を起こしたのは、法の秩序を守る公の論理からみれば許されないことで処罰されるべきと言った（「徂徠擬律書」）。これに対して、林大学側の室鳩巢は、亡き主君の無念を晴らした浪士たちの行動は「武士道」の忠義心を実現した義挙で、浪士は義士だから、助命すべきと主張した。実際の幕府の裁定は46名全員の浪士を切腹処分にしたので、朱子学者・徂徠の意見を尊重したように見える。

ところが、この幕府の処分に対して当時の庶民の多くは不満だった。滝沢馬琴の「楠正成軍慮智恵輪」（1797年）には「楠、大石に化するの図」が挿入されている。図は、菊水の旗を持つ楠正成が火事装束の大石内蔵助の姿で、詞書に「くすの木みなと川にてうち死せしとき、・・・えんやの忠臣大石とうまれかはれり」と書かれている。「太平記」の正成の臨終の言葉「七生までただ同じ人間に生まれて朝敵を滅ぼさばや」を踏まえたものである。だから「太平記読み」の素養のある江戸期の人々は、幕府の処分は喧嘩両成敗の原則から外れた不当なもので、それに異議を申し立てた浪士の討入は正当な仇討で、大石内蔵助は楠正成の生まれ変わりと直感し、



楠大石に化する図

<sup>1</sup> 土田衛氏は寛延元年から幕末までに浄瑠璃70回、歌舞伎280回、小計350回。その他の義士劇が浄瑠璃で46回、歌舞伎で165回、小計211回、総計561回と推計している。（国文学解釈と鑑賞S46年12月号）

「忠義の鑑」である楠正成の再来と考えた。

明治期になると、忠臣蔵は天皇家（=国家）に忠誠を捧げる庶民のイデオロギーとして利用された。明治元年 1868 年 11 月 5 日、京都を発って東征途中の明治天皇一行が高輪泉岳寺前にさしかかった時、その行列が止まった。行列から泉岳寺に対して、明治天皇の勅書と金一封が贈られた。その勅書には、「汝良雄等 固ク主従ノ義ヲ採リ 仇ヲ服シテ法ニ死ス 百世ノ下 人ヲシテ感奮起セシム 朕深ク 嘉焉賞ス」とあり、赤穂義士を顕彰したというのである。真偽のほどはよく判らないが、赤穂事件に対して朝廷は吉良上野介が幕府側の朝廷工作の中心人物で憎い人物だったのに対して、浅野家は天皇家を以前から尊敬していたので好感を抱いていた経緯もあり、浅野側に好意的だったという。それはともかくとしても、東征の最中に真っ先に赤穂義士を顕彰したのは、江戸の庶民に人気があった赤穂義士を讃えて民心を慰撫し、徳川幕府に変わって新しい為政者となった天皇と天皇家（=国家）に対する忠誠を求めたと思われる。こうして忠臣蔵は、明治の天皇制を思想面で支える重要な役割を果たすことになった。

明治後期の日清・日露戦争前後に忠君愛国熱が高まった頃から、忠臣蔵の見方に変化が起きた。桃中軒雲右衛門の浪花節「義士伝」（1907 年）、福本日南「元禄快挙禄」（1908 年）が、赤穂浪士の仇討は「忠臣義士像」の見本に止まらず、彼らが切腹して果てたことは「武士道の精華」、「日本精神の見本」と持ち上げたのがきっかけだった。この頃から、忠臣蔵と言えば「武士道」の話で、「花は桜木、人は武士」（10 段目）というように赤穂浪士は忠義を尽くす武士の代表に短絡的に結びつけられるようになった。戦争中の 1942 年に大阪中座で公演された「仮名手本忠臣蔵」は、欧米=高師直、日本=義士に見立てて、世界に輝く日本魂が米英に最後のとどめを刺すまで戦おうというスローガンを掲げている。こうしたファシズムの忠臣蔵利用は、その後太平洋戦争で日本が敗北するまで続いた。

戦後は、ファシズムによる忠臣蔵の「忠君愛国」利用が甚だしかったので、日本を占領した GHQ は忠臣蔵を軍国主義の宣伝媒体とみなして上演禁止にした。しかし、約 1 年後の S22 年（1947 年）7 月に解禁されて同年 11 月東京劇場で再演されると。この興行はやはり大当たりとなり、昔から「忠臣蔵」の通り相場「独仁湯」の譬えが人々の間によみがえった。その頃から映画が大流行して、1952 年 7 本、1953 年 5 本、1954 年 8 本などと続々と忠臣蔵映画が作られた。1950 年代から 60 年代前半頃に作られた「忠臣蔵」は、仇討ちは控え目で、義士たちが耐え忍んだ末に大願を成就するストーリーが強調されて高度成長期にマッチした物語になった。1953 年～1965 年の高度経済成長期には各社が競って集団の力で艱難辛苦の末に大願成就したドラマとして忠臣蔵を制作したので、忠臣蔵映画の黄金時代だったという人もいるほどである<sup>2</sup>。1960 年代後半になると、映画に代って TV が映像

<sup>2</sup> 谷川建司「忠臣蔵映画の全貌」（集英社、2013 年）

メディアの中心になり、「赤穂浪士」（大仏次郎原作、1964 年 NHK 大河ドラマ）、「峠の群像」（堺屋太一原作）、「元禄繚乱」（船橋聖一原作）が登場し、復讐劇に伴う人間模様や体制批判が強調されるようになった。近年では「四十七人の刺客」（池宮彰一郎）、「最後の忠臣蔵」が作られている。

最近も女子学生が言っていた。「忠臣蔵ってバカな殿様（浅野内匠頭）のせいでみんな不幸になった話よね。赤穂浪士はバカ殿の無思慮な行動で失業し、あげく討入に半ば追い込まれただけ。吉良上野介に至ってはなんの落ち度も無い単なる被害者。それを美談として後生大事に平成の世まで語り継いでこられた理由がなんなのか未だに理解できません」。逆説的な言い方だが、女子学生が胡散臭い<sup>うさんくさい</sup>と思うほど今日でも忠臣蔵は人々によく知られている。

谷川建司氏は、忠臣蔵は息の長さで支持者の層の厚さをみると「国民の物語」と呼ぶにふさわしいもので、「忠臣蔵」の歴史の中にこの国の歴史の一面が色濃く反映されていると指摘している。それにしても忠臣蔵が激しい毀誉褒貶にさらされながら、江戸中期 1748 年から今日に至るまで約 250 年間にわたって日本人の心情に受け入れられ、広く支持されてきたのはどういう理由だろうか。私も谷川氏と同じように、各時代の忠臣蔵評価の変遷を眺めると、日本人は時代が変わるたびに何度も「忠臣蔵」の物語に自分を重ねて見てきたように思われる。だからその時代の人々が忠臣蔵のどこにどのように共鳴しているのかを探れば、忠臣蔵が長い間にわたって支持された理由がわかるのではないか。時代ごとに表明された支持理由を並べてみれば、日本人の心の中で忠臣蔵が果たしてきた役割もはっきりするのではないかとと思われる。

## （2）「仮名手本中心蔵」と「忠臣蔵」

我々がよく知っている「忠臣蔵」の史実は、昭和時代に描かれた真山青果の「元禄忠臣蔵」（1941 年）による物語である。江戸城で発生した事件の 5 日後の早朝、国許の赤穂城に第一の使者が刃傷の報を、深夜に第二の使者が切腹の報を届け、城内が騒然となる。家臣の評定は殉死、籠城、復讐の間を揺れて、事件発生から一か月後に 3 百人の家臣中 50 名の有志の間で血盟が交わされ、城が明け渡される。このことを真山青果は「元禄忠臣蔵」で、「江戸城の刃傷」「第二の使者」「最後の大評定」の三部に分けて描いた。これが戦後盛んに映画や TV で演じられた忠臣蔵の冒頭の定番となり、我々が知っている忠臣蔵の冒頭部分になっている。作者の真山はこの冒頭の三篇をことのほか重要と考えていたようで、全 10 編中の序あるいは起であるとともに、全篇の要であるとその娘が述べているほどである<sup>3</sup>。

これに対して、江戸時代に描かれた竹田出雲、三好松落、並木千柳が共著した「仮名手本忠臣蔵」（1748 年）では、鎌倉扇が谷の塩治判官の屋敷で起きた一日の出来事に凝縮される。

---

<sup>3</sup> 真山青果「元禄忠臣蔵」（岩波文庫、1982 年）

史実は江戸と国許の赤穂の間で展開されている事件だが、「仮名手本忠臣蔵」では、判官が9寸5分を腹に突き立てると、国許から大星由良之助が駆けつけて、苦しい息の下で判官が大星に「9寸5分は汝への形見、我が鬱憤を晴らさせよ」と言って絶命する。

このように我々が知っている忠臣蔵は「新しい忠臣蔵」と呼べるもので、当初の江戸時代からあったストーリーではない。今のような内容になったのは明治以降で、日清日露戦争前後の忠君愛国熱が高まってきた時期に、赤穂事件が実際の場所で実名の人々が活躍する実録風の忠臣蔵が誕生した以降の事である。新しい忠臣蔵は、冒頭部分に限らず、江戸時代到大流行した「仮名手本忠臣蔵」（二代目竹田出雲、三好松洛、並木宗佑共著、1748年）を全面改定したもので、新旧は著しく異なる容貌をしている。

徳川時代には幕政批判は御法度だったので、当時の事件をそのまま演劇や小説にすることはできなかった。そのため「仮名手本忠臣蔵」は、時代が鎌倉時代末期、場所は鎌倉で、勅使下向の春弥生に足利将軍の弟、足利直義が鶴ヶ丘八幡宮が完成間近になって下向してきたという設定で始まり、登場人物も「太平記」の登場人物に読み替えられた。

- |            |          |           |          |
|------------|----------|-----------|----------|
| ・吉良 上野介    | →高 師直    | ・浅野 内匠守   | →塩治 判官   |
| ・浅野の妻、名前不詳 | →顔世御前    | ・大石 蔵之助   | →大星 由良之助 |
| ・大石 力      | →大星 力弥   | ・伊達 左京亮   | →桃井 若狭助  |
| ・梶川 与惣兵衛   | →加古川 本蔵、 | などとなっている。 |          |

本筋は忠臣蔵と大体同じで、高師直のイジメに塩治判官が耐え切れず刃傷を起こす。判官は切腹しお家断絶になるのに高師直にお咎めがない。そこで家老の大星由良之助は討入をして高師直の首をとるというもの。しかし、「仮名手本忠臣蔵」の特徴は、赤穂事件の刃傷や討入はあまり重要なことでなく、本筋とはあまり関係ない上方風の「世話物」のエピソードが全体の半分ほどを占め、ストーリーの中心になる。そのため、どこが忠臣蔵と関係あるかも判りにくい場面もある。たとえば、お軽勘平の悲恋、加古川本蔵親子の悲劇などで、私たちの知っている忠臣蔵とは別の話のようにも見える。本章の末尾に「仮名手本忠臣蔵」のあらすじを掲載する。

その上に、「仮名手本忠臣蔵」はもともと浄瑠璃のための台本として作られたが、好評で翌年には歌舞伎に書き換えられて上演されている。以降、浄瑠璃と歌舞伎が同時並行的に演じられてきた。同様の台本を使うとはいえ浄瑠璃と歌舞伎の間にはいくつかの違いがある。浄瑠璃の「評定」は、殉死派の千崎弥五郎と反対派の斧九太夫のやり取りがあるだけにすぎない。しかし、歌舞伎では黙考する大星に九太夫が御用金の配分は知行高割りにすべきだと強く主張して、一座の雰囲気御用金配分に向かわせようと図る。それに対して大星が最後に朗々たる演説で、その料簡はまだ若い、若いと言って武士としての苦悩を語って、

討死路線を提案し了承を得る。歌舞伎では人の物欲、武士の苦悩、熟慮がこの場面に重ねて表現される場面となっている。

さらに、浄瑠璃と歌舞伎の上演内容を見ると、公演時間の制約などのため歌舞伎には大幅な演目の削減もある。このように忠臣蔵は、時代によって内容に制約があっただけでなく、文楽か歌舞伎か講釈かなど公演方法によっても大きな制約を受けてきた作品である。下表に「浄瑠璃と歌舞伎の公演内容の違い」を掲げるが、我々の研究は、最初に作られて作者の意図を最も忠実に表している「仮名手本忠臣蔵」を素材にして進めることとする。

(参考) 仮名手本忠臣蔵の文楽と歌舞伎の公演内容の比較

| 段            | 段の内容  | H24 年 11 月                              | H25 年 12 月                          |
|--------------|-------|-----------------------------------------|-------------------------------------|
|              |       | 文楽公演 (国立劇場)                             | 大歌舞伎 (歌舞伎座)                         |
| 大序           | 鶴岡    | 鶴ヶ岡兜改めの段<br>恋歌の段                        | 鶴ヶ岡兜改めの段                            |
| 二段目          | 桃井館   | 桃井館力弥上使の段<br>本蔵松切りの段                    | —                                   |
| 三段目          | 足利館   | 下馬先進物の段<br>腰元おかる文使いの段<br>殿中刃傷の段<br>裏門の段 | 門前進物の場<br>松の間刃傷の場                   |
| 四段目          | 塩谷館   | 花籠の段<br>塩谷判官切腹の段<br>城明け渡しの段             | 塩谷判官切腹の場<br>表門城明渡の場                 |
|              |       |                                         | 道行旅路の花婿                             |
| 五段目          | 山崎街道  | 山崎街道出合の段<br>二つ玉の段                       | 鉄砲渡しの場<br>二つ玉の場                     |
| 六段目          | 与一兵衛内 | 身売りの段<br>勘平切腹の段                         | 勘平切腹の場                              |
| 七段目          | 祇園一力  | 祇園一力茶屋の段                                | 祇園一力茶屋の場                            |
| 八段目          | 道行    | 道行旅路の嫁入り                                | —                                   |
| 九段目          | 山科閑居  | 雪転しの段<br>山科閑居の段                         | —                                   |
| 十段目          | 天河屋   | 天河屋の段                                   | —                                   |
| 十一段目<br>(大詰) | 討入    | 花水橋引揚の段<br>光明寺焼香の段                      | 高家表門討ち入りの場<br>同 奥庭泉水の場<br>同 炭部屋本懐の場 |

### (3) 検討の視点

この研究の目的は、日本人が長い間にわたって忠臣蔵を愛し続けてきた理由を探ることだが、その分析を進めると忠臣蔵の元祖の「仮名手本忠臣蔵」が、我々が知っている忠臣蔵とは別の構成や意図を持った作品だったことが判る。そこで、その構成や意図を分析して、その違いを理解することがこの研究を進めるうえで重要なポイントになる。

丸谷才一氏は「忠臣蔵とは何か」（講談社学芸文庫、1988年）で、忠臣蔵は「御霊信仰による復讐劇」だったと主張した。彼は「曾我物語」の御霊信仰を受け継いだ「將軍殺し」の意図を持った祝祭（カーニバル）とみる考え方を提起した。この提案は多方面から議論を呼び、近世文学研究者・諏訪春雄氏から従来の研究の主流の「判官びいき」論から反論が出された。両者の主張はS60年上半期の雑誌「群像」で忠臣蔵論争として展開された。

また、福沢諭吉は、赤穂不義士論を展開している（「学問のすすめ」第6編）。福沢は、浅野の家来が主人の仇討といって吉良上野介を殺したことを世間は「赤穂の義士」と呼んで賞賛しているが、それは間違いである。確かに、浅野へ切腹を命じて吉良へ罰しなかった幕府の裁判には不公平があった。しかし、その裁判が不公平と思うなら浅野の家来は政府へ訴えるべきだった。47人もいるのだから、各人が命をかけて道理を訴えれば何人かは命を落としたかもしれないが、政府も最後にはその道理を認めて吉良にも罪を加える正しい裁判をしてくれよう。国の権限を侵して自分勝手に他人の罪を裁けば、国内に私裁<sup>リンチ</sup>を許すことになり、国が乱れるもとなる。国法に従って裁判を受けてその判断に従って初めて「義士」と呼べるのだから、赤穂浪士がした事は「不義士」だったと言うほかない。この福沢の主張は、赤穂事件を武士道に基づく仇討ドラマとみる意見に他ならない。

さらに、おかる勘平の愛情劇、加古川本蔵一家の親子愛の劇に焦点を当てれば、色、金、による封建社会の悲劇という切り口もあるだろう。「仮名手本忠臣蔵」への代表的な視点は、

- ① 権力の不公平な処分に対する判官びいき
  - ② 武士道にもとづく仇討ドラマ
  - ③ 御霊信仰による復讐劇
  - ④ 色、金による封建社会の悲劇
  - ⑤ 体制批判劇
- がある。

最近では「忠臣蔵カタルシス論」まで登場している。カタルシスを「清算」の意味と考えて喧嘩の借りを返す、貸しを返すドラマだったという議論である。こうしてみると、忠臣蔵が長い期間にわたり広く日本人の間で好まれてきた理由を探るのは並大抵のことではないことがわかる。



本稿では、はじめに丸谷・諏訪の忠臣蔵論争の論点整理からはじめて、次いで赤穂事件が次第に「太平記」に「世界定め」されていくことで「仮名手本忠臣蔵」という演劇に昇華して行った過程を見る。「縦筋」を「太平記」の世界としたうえで、戯作者の腕の見せ所だった「横筋」にこらされた様々な趣向をみてゆくことで、忠臣蔵の魅力を抽出することにする。以上のような分析視点により日本人が忠臣蔵を愛してやまない理由について考察することとする。



11 段目 高家表門討入の場（産経新聞社）

## (参考) 「仮名手本忠臣蔵」 あらすじ

### 大序 鶴岡社頭兜改めの場

1338年2月下旬、将軍足利尊氏は鶴ヶ岡八幡宮の造営を機に、尊氏が滅ぼした新田義貞の兜を八幡宮の宝蔵へ納めるよう弟・足利直義に命じる。そのため八幡宮の社頭に足利直義、足利家の執事・こうのもろなお高師直、馳走役のももいわかさのすけ桃井若狭之助、塩冶判官えんやはんがんこうさだ高定が集まる。高師直ははじめ義貞の兜奉納に反対するが、桃井若狭之助から兜の奉納が新田義貞の残党を鎮める尊氏の計略とたしなめられる。これが高師直の怒りをかう。義直は義貞の兜を見つけ出すために、昔御所に勤めていた塩冶の妻・かおよごぜん顔世御前を呼び出す。兜にらんしやたい蘭奢待の香りがあるので、顔世はすぐにその兜を見つけだす。皆は兜を奉納するため神社に入る。前から顔世に横恋慕していた高師直は顔世を引きとめて言い寄る。和歌を添削するといって近づき恋文を渡そうとする。顔世は困ってそっと投げ返す。その口説きの現場を若狭之助がみて、顔世を退出させる。口説きを邪魔された師直はますます若狭之助に辛く当たる。若狭之助がカッとなり刀を抜こうとするが、判官が止める。

### 二段目 桃井館本蔵松切りの場

若狭之助の屋敷では下男だちが主人が高師直にいじめられた噂話をしている。家老加古川本蔵の妻・戸無瀬と娘・小浪も心配する。そこへ大星力弥が明日は正七つ時(午前4時)に登城するようにと伝えに来る。力弥は小浪の許嫁である。ところで、怒りが収まらない若狭之助は師直を討つつもりと加古川本蔵に打ち明ける。本蔵は縁先の松の枝を切って師直を斬ることに同意する。

### 三段目 足利館門前しんもつ進物の場

しかしその夜、加古川本蔵は、主人に内緒で急遽驚くほどたくさんの金品の賄賂を師直に届ける。師直の機嫌はよくなる。家来の驚坂伴内も愛想よくなり、御殿の中へ本蔵を誘う。家来の加古川本蔵が師直に賄賂を贈ったことを知らない若狭之助は、今日こそ師直を切ろうと覚悟を決めて松の廊下へとやってくる。ところが師直が平身低頭するので、怒りをこらえつつ若狭之助は奥へと入っていく。物陰で見ていた本蔵はホッと一安心する。

### 同 松の間刃傷の場

そこへ遅れて現れた塩冶判官に師直は小言を言い始める。おりしも顔世から師直への文が届けられるが、それは顔世が師直を袖にする意味をこめた古い歌だった。師直はてっきり顔世が夫にうちあけたのだろうと腹をたて、塩冶判官をねちねちといびり始める。判官は初めのうちは師直の態度を受け流していたが、「鮒侍」と言う師直の悪口雑言にたまりかねて、判官はついに師直に斬りつける。

ちょうど近くにいた加古川本蔵に抱きとめられ、師直に止めをさすことはできない。

### 浄瑠璃 裏門外の場合

殿中の刃傷沙汰で表門と裏門が両方閉められる。師直から顔世への手紙を持参した腰元お軽は、刃傷が起こった時、判官の家来で恋人の早野勘平と逢引していた。屋敷へ戻れず判官のそばへ行けなくなった勘平は、武士の面目を失い、責任を感じて切腹しようとするが、お軽に止められる。そこで山崎のお軽の実家へ向かうことにする。そこへ師直の家来鷺坂伴内が追いかけてきて、お軽に横恋慕していた伴内はお軽を手に入れようとするが、逆に勘平に蹴散らされる。

### 四段目 扇ヶ谷塩冶判官切腹の場合

判官は切腹と領地没収を言い渡される。判官は城代家老・大星由良之助の到着を待つが、上使にせかされて切腹する。その時、必死で駆けつけた由良之助に、判官は苦しい息の下で、無念の思いと腹を切った刀（九寸五分）を形見に与えてうっ憤を晴らすよう遺言して絶命する。

判官の遺体は光明寺へと運ばれる。館では家臣たちが今後どうするかで意見が割れる。藩のお金を浪人になる家臣に頭割りする由良之助の意見に対して、主席家老・斧九太夫は籠城して殉死するか藩のお金を知行高に割ることを主張。由良之助の本心は亡き主君の遺言どおり仇討ちをすることと聞くと、家臣たちは由良之助に一任することで意見がまとまった。

### 同 扇ヶ谷表門城明渡しの場合

その夜、判官の遺体を光明寺へ送り届けた力弥や他の侍たちが、すでに館が明け渡されたと知って門前に押しかける。彼らは殉死を主張するが、由良之助は形見の刀を出して仇討を主張する。すると家臣は納得して館を惜しみながら引き揚げた。館から上使・薬師寺らのあざ笑う声が聞こえる。

### 五段目 山崎街道鉄砲渡しの場合

山崎のお軽の実家に落ち着いた勘平は獵師になる。日も暮れた山の中で、偶然にかつての塩冶の家来・千崎与五郎に出会う。千崎から仇討の資金調達をしていると打ち明けられて、勘平は、由良之助への取り成しを条件にお金を届ける約束をする。

### 同 二つ玉の場合

一方、お軽の父親与市兵衛は、勘平のために金を作るため、祇園の一文字屋へお軽を奉公へ出す契約をする。しかし、半金の五十両を受け取って暗い夜道を家へと急ぐ途中無残にも斧定九郎に殺されてしまう。逃げる定九郎を猪と間違えて、勘平が鉄砲を撃つ。勘平が手探りで獲物を探すとそれが人間だった

とわかる。あわてる勘平の手に 50 両が出てくる。勘平はうしろめたさを感じながらも 50 両を抜き取る。

## 六段目 与市兵衛内勘平切腹の場

翌日、与市兵衛の家におかると母・おかやがいたら、一文字屋のお才がお軽を連れに来る。そこへ勘平が帰ってくる。一文字屋が証文と貸した縞の財布を見せると、にわかに勘平の顔色が変わる。罪におののく勘平におかるとは身を切られる思いで別れを告げる。おかるとが去った後、母・おかやは勘平が与市兵衛を殺したのではないかと問い詰める。そこへ浪士の不破数右衛門と千崎弥五郎が勘平を訪ねてくる。昨夜受け取ったお金は勘平が罪を犯して得たものだから受け取れないといいに来た。一縷の望みを失った勘平は切腹する。

その後、余市兵衛の死因が定九郎が刺した刀傷だったと判る。勘平の疑いが晴れて、むしろ舅を殺した犯人を撃ったとわかる。瀕死の勘平は仇討の連判状に血判を押すことを許されて息絶える。

## 七段目 祇園一力茶屋の場

浪士たちのあせりをよそに、由良之助は祇園で遊興に明け暮れる。元足輕の寺岡平右衛門が寝ている由良之助に仇討に参加したいという嘆願書をだす。しかし投げ返されて相手にしてもらえない。

そこへ斧九太夫が由良之助に仇討の意思があるかどうかたしかめにくる。行動から見て仇討の意思はないと思うが、念のために床下に忍んで様子を伺う。

そこへ力弥が顔世御前の密書を届ける。だれもいないのを確かめて由良之助は密書を読む。しかし、離れの二階からは遊女となったお軽が手鏡を使ってそれを読み、床下から身をのりだした斧九太夫は、手紙の端を破りとる。

気付いた由良之助は、二人を殺そうと考えて、まずお軽に身請けを持ちかける。由良之助が、身請金を払いに奥へ行った間に、兄・寺岡平右衛門がきて、秘密を知ったお軽が由良之助が殺されるなら、自分が妹を殺すと言って、お軽に刀を向ける。逃げまどうお軽は、自分が殺した手柄で兄に仇討に参加させくれと訴える。そして父・与市兵衛が殺されたこと、さらにお軽の夫・勘平が切腹したと話すと、お軽は悲しみに苦しみだす。お軽が自害しようとする、物陰で全てを聞いていた由良之助が、平右衛門に仇討への参加を許す。次いで由良之助はお軽の手に刀をにぎらせ、床下を突き刺し、裏切り者の斧九太夫を引きずり出す。平右衛門に鴨川で水雑炊を食べさせろ(水に投げ込んで殺せ)と言う。

## 八段目 <sup>みちゆき</sup>道行旅路の嫁入り

加古川本蔵の娘・小浪<sup>こなみ</sup>は、お家断絶になった大星由良之助の長男・力弥と婚約したがまだ結婚してなかった。小浪の力弥への思いは募る一方だったので、嫁入りさせようと考えて、ある日母・戸無瀬<sup>となせ</sup>と二人連れで鎌倉から力弥が住む京都山科へ向かう。断られるかもしれないため、腰元も連れず、乗り物にも乗らない親子二人旅である。東海道を上って、無事山科に近い所へ着いた。ここでは、東海道の地名を出しながら、母子の情愛、力弥を慕う小浪の恋心、結婚への期待感が語られて情感のある道行きの場

面になっている。（もともと人形浄瑠璃には「道行」と呼ばれる場面があり、浄瑠璃の語りを聞かせる場面である。行く「道」に因んだ地名や観光名所が掛詞で語りこまれていて、それと同時に登場人物の心情も語られる。ここではそうになっていないが、「道行き」には名場面が多く、「道行き」＝「心中への道中」という意味合いもある。）

## 九段目 雪<sup>ゆき</sup>転<sup>こ</sup>しの段

祇園・一力茶屋で遊んだ由良之助は幫間や仲居を連れてよろけながら朝帰りする。幫間に雪転がしをさせる。お石が甲斐甲斐しく世話をする。出来た雪玉を日陰に置けば溶けないと言って、裏庭へ運ばせる。

## 同 山科<sup>やまき</sup>閑居

そこへ、加古川<sup>かこがわ</sup>本蔵<sup>ほんぞう</sup>の妻・戸無瀬<sup>とみなせ</sup>と娘・小浪<sup>こなみ</sup>が来る。乗って来た駕籠も返して上がりこんで、小浪<sup>りき</sup>と力弥<sup>りき</sup>を結婚させてほしいと言う。しかし、お石は嫁入りを拒絶する。立つ瀬をなくした戸無瀬が自害しようとする、小浪も自分が死ぬといい、親子二人で自害しようとする。その時、外で虚無僧が吹く尺八の「鶴の巢籠」が聞こえる。いよいよ母が娘に刀を振り上げると、「ご無用」と声をかける。すると奥から出てきたお石が、娘を殺してまでと思ひ詰めた戸無瀬と小浪の貞女ぶりを不憫に思い、加古川本蔵の首をもってきたら祝言を認めると言う。塩谷判官が高師直を斬る邪魔をしたこと、賄賂を贈って高師直に取り入った憎い本蔵をほったままにしてその娘を嫁にはできないからだというのである。

すると、虚無僧が本蔵の首を差し上げると言って入ってくる。虚無僧は本蔵だった。しかし、本蔵がお石の頭を踏みつけ、由良之助を罵るので、力弥が本蔵を槍で突き刺す。力弥がとどめを刺そうとすると、由良之助が止める。由良之助は苦しむ本蔵に奥庭の雪で作った二基の五輪の石塔を見せて、由良之助も力弥も間もなく仇討をして死んでいく覚悟を示す。お石もすぐ後家になるのが分かっている嫁を貰うわけにいかない、むごいことをいったのだという。瀕死の本蔵はそれを聞いて喜び、高師直の屋敷の図面を渡す。その図面こそ由良之助が最も欲しいものだった。本蔵はさらに雨戸を開けるには絞った弓を当ててその弦を切ると鴨居がしなまって戸が外れると教える。ここで本蔵は息を引き取る。由良之助は本蔵の編笠をかぶって堺の天川屋へ出発し、討ち入りの準備が始まる。

## 十段目 天河屋<sup>てんが</sup>義平

堺の商人・天河屋義平は、塩谷から得た恩返しで、今回の討ち入りの武具全般を調達し、鎌倉まで輸送する役を請け負っている。討ち入りは御法度だから、それを手伝えることは極秘である。天河屋では武器調達が知られぬように奉公人に適当な理由をつけて解雇し、妻（おその）も実家へ帰したので、家には義平、丁稚の伊五、よし松（4歳）しかいない。

店に郷右衛門と力弥が、明日鎌倉へ出発する旨のあいさつに来る。入れ替わりに妻の父・太田了竹が来る。実家に戻ったおそのを金持ちの妾にして儲けようとする下心から離縁状を書いてほしいという。母恋しさに泣くよし松もいて、おそのは恋女房でもあるが、義平は断腸の思いで離縁状を渡して帰す。

その夜更け、突然捕り手が天河屋へ押し入ってくる。夕方発送した荷物を運びこんで、討ち入り道具かどうか中身を改めるというが、義平は断る。すると捕り手は、よし松を連れてきて白状しないところの子を殺すという。義平は顔色も変えず、天河屋の義平は男でござる。子供にほだされて、知らないことを知っているとは言えないと啖呵を切る。そこへ長持ちから由良之助が現われる。義平が真に信用できるか試した、義平こそ思った通りの立派な人物だったとあって、これまでの無作法を詫げる。その直後、義平が書いた離縁状をもっておそのが登場する。自分は他家へ嫁へ行く気はないし、よし松がかわいいので戻ってきたという。しかし、義平はあとで災難が降りかかると心配しておそのを追い返す。すると突然、おそのに覆面男が襲いかかって髪を切る。おそのは絶叫する。それに気づかないように、引出物を置いて由良之助一行は出発する。義平が包みを開くと、おそのの髪の毛、櫛、<sup>こうがい</sup>笄、そして離縁状が出てくる。由良之助は、おそのが尼の姿でいれば父の了竹も妾奉公には出せない、おそのは乳母として息子の世話をすればよい。髪が伸びる頃には討ち入りも終わっているので再び嫁にすればよい、という。さらに、義平も討ち入りに参加できるように、「天河屋」の名前から「天」と「河」をとって討ち入りの合言葉に使うという。義平は大いに感激する。

## 十一段目 高家表門討入の場

大星由良之助らは、「柔よく剛を制し、弱よく強を制する」というおきてを守り、師直の屋敷がある鎌倉稲村ヶ崎の守りの手薄な場所にそっと近づいて上陸する。他方、師直は、由良之助の放蕩三昧という情報に気を許し、酒宴の最中である。大星らは、表門と裏門の二手に分かれて、師直邸に乱入する。弦をかけた丸竹を鴨居と敷居の間に挟んで一時に弦を切ると雨戸はパタパタと外れる。夜討ちだという声がして明かりが動き回る。隣りの屋敷からも何事かと声がかかる。主君の恨みを晴らすための討ち入りだから手を出さないでほしいと応える。

## 同 炭部屋本懐の場

炭部屋に隠れていた師直を見つけ出す。由良之助は、師直を上座に座らせ、「主人の仇を討つために参上。立派にお首を頂戴したい」というと、師直が刀で切りかかる。由良之助が初太刀で切りつけ、塩谷判官の形見の九寸五分で師直の首を落とす。懐中から亡君の位牌を取り出し、師直の首の血を拭き清めて、兜に入れていた香を焚き、何度も礼拝し、泣きながら挨拶をする。一番鎗の矢間十太郎が焼香をする。二番目は由良之助の番だったが、由良之助は「ほかに焼香させる者がいる」といって、縞の財布を取り出して早野勘平を指名する。寺岡平右衛門は勘平の妻おかるの兄で、縞の財布を香炉にのせて焼香を果たす。

## 大詰 花水川引き揚げの場

やがて、駆けつけた桃井若狭之助の勧めに従って、亡君の墓の前で切腹することになり、一同は、塩谷判官の菩提所である光明寺に引き揚げる。

## 第2章 忠臣蔵は御霊信仰で読めるか～丸谷・諏訪論争

### (1) 怨霊を慰撫する忠臣義士

丸谷才一は「忠臣蔵とは何か」と問いて、歌舞伎と御霊信仰の関連に着目し、「あれは浅野内匠頭長矩という当代随一の荒人神を祀るため、2年がかりで準備した大規模な儀式だった」と結論付けた。赤穂浪士の討ち入りは「怨霊慰撫」という土俗信仰によると解釈できる、浅野内匠頭長矩の刃傷の原因ははっきりとはわからないが、浅野が何かに酷く憤っている怨霊のようなもので、大石たちはその浅野の怨霊を慰撫するために吉良の首を挙げたといえるのではないかというのである。その根拠に次の事例がある。

九寸五分が象徴する浅野の無念（第四段）

上使がやって来て切腹を申し付けられて判官はその一人右馬之丞に対して言う。「うらむらくは館にて、加古川本蔵に止められ、高師直を討ちもらし無念。骨髓に通って忘れ難し。湊川にて楠正成最期の一念によって生を引きといひしごとく。生きかわり死にかわり、うっ憤を晴らさんと」。判官は苦しい息の下で「定めて仔細聞いたであらう。エエ無念口惜しいはやい。由良之助、この九寸五分は汝へ形見、我が鬱憤を晴らせよ」と言い残す。

九寸五分を引き継いで由良之助は主君の復讐を誓う（第四段）

「由良之助にじり寄り刀取り上げ押戴き。血に染まる切っ先を打ち守り、拳を握り、無念の涙はらはらはらはら。判官の末期の一句五臓六腑にしみ渡り。さてこそ末世に大星が忠臣義心の名を上げし根ざしは斯くとしられける」。十一段目で本懐を遂げた直後、由良之助は懷中から判官の位牌を取り出して高師直の首を手向けて「去るご切腹のその折から あと弔えと下されし九寸五分にて 高師直の首かき落とし 御位牌に手向ける。草葉の陰にてお受け取りくださるべし」と涙ながらに礼拝する。

「太平記」で湊川の合戦に敗れた <sup>くすのきまさしげ</sup>楠正成と弟・<sup>まさすえ</sup>正季は刺し違えて自害する時、七度生まれ変わってもやはり同じ人間界に生まれかわって朝敵を滅ぼしたい」と答えた無念な気持ちを持ったまま死んだ人である。楠木兄弟はこれからも怨霊になってあらわれるというメッセージを伝えている。浅野もまた楠木兄弟と同じように怨霊になった人である。

実際には浅野内匠頭が切腹した時には大石らは赤穂城にいたので切腹場所で主従が対面などできるはずはなかったが、「仮名手本」では浅野が九寸五分を形見代わりに渡し、大星が塩治判官の無念さをしっかり受け継ぎ、仇討ちの決意表明をしているように描かれている。そのことは歌舞伎になるともっとはっきりする。歌舞伎では、大星はその九寸五分の刀を城外へ持って行って、「判官の末期の一句五臓六腑にしみわたり」のセリフを言いながら、

血の付いた刀をなめて、「忠臣義臣の名を上げし根ざしはかくと知られけり」と高師直の首をかき切る仕草をするほどになっている。主君の血をなめて主君の怨霊を自分の体内に取り込み、主君と一体化して引継ぐ儀式をしている。

自害した勘平もまた、死にたくない、仇討のお供したいと恨みを残して死んだ（第六段）。

「アア仏果とはけがらわし。死なぬ、死なぬ、<sup>こんぱく</sup>魂魄この土にとどまって 敵討のお供をする」と四苦八苦しながら述べる。しかしその恨みは十一段目で解消する。義士たちが本懐を遂げたのち、由良之助は縞の財布を取り出して「その身は不義の誤りから一味同心も叶わず。・・・不憫な最期を遂げさしたと、片時も忘れず、その財布を今宵の夜討ちにも同道致した」といって成仏させる。

勘平が自害した原因は、持っていた縞の財布により親殺しの冤罪を引き起こしたためである。実際は斧定九郎が勘平の親を殺して奪った財布である。勘平はその定九郎を猪と間違えて撃ち殺して、その財布を手に入れた。だから、勘平の行為は親の仇を討って、盗まれた財布を奪い返したものだ。大星は最後に勘平の意を汲んで、義理の弟・平右衛門に勘平の名代として焼香させる。この大星の行為も勘平の怨霊を懐に抱いて討入を行ったもので、大星が勘平と一体化し、無念を晴らしたと報告しているようである。

## （2）御霊信仰について

御霊信仰とは疫病や天災で非業の死を遂げた人々の御霊を崇りと恐れて、その御霊を鎮めることによって平穏を回復しようとする信仰をいう。曾我兄弟の御霊、菅原道真の御霊がそれである。「曾我物語」は苦節 18 年目に父の敵の工藤祐経を討って本懐を遂げて討死する話。菅原道真は「菅原伝授手習鑑」に登場するが、九州大宰府へ流罪されて死去した菅原道真の敵討ちをその家来の子供たちが果たす話である。

丸谷氏は、この御霊に塩谷判官を加えると赤穂浪士が曾我兄弟に範をとったことがあぶり出しのように浮かび上がるという。日本人は長い間、赤穂浪士の仇討を「武士道の精華」で浪士を「武士の鑑」とみてきた。しかし彼らがどんなに忠節の士でも、怨恨が猛威を振るうことを信じていなければあの敵討ちはなかったのではないか。「武士の道徳」だけではあの事件をとらえようとするのは、現象にとらわれて本質を見逃してしまう。忠臣蔵の核心は「武士道」でなく、曾我伝説に色づけられた土俗信仰にある。その気分は赤穂浪士の心だけでなく、当時の江戸の市民が抱いていた気分である。当時江戸はすでに大都市になっていて、住む人々の意見が世論を形成しその世論が江戸の人々の行動や思いに影響するようになっていた。その世論は、御霊信仰にもとづいて浅野と吉良の争いをめぐる幕府の処置を咎め、浅野に判官びいきから家臣に同情して敵討ちを督促していた。しかも、その世論はここは一つ曾我で行ってくれという遊戯の注文まで付けたに違いないというのである。



丸谷氏は、この御霊信仰を強調して、当時の五代将軍・綱吉の悪政批判を展開する。綱吉将軍は四代家綱の三男で、能と儒学に凝り「元禄時代」を作り出して名君を気取るユニークな人だった。もともと三男だったので将軍職に就く見込みはなかったが、次兄が発狂、長兄が病死で早世したため、天が彼を抜擢した気分で就任した。勉強をよくし、派手な賞罰を繰り返して諸大名から恐れられた。仁政に努めたが、凶作、地震がなどの天災が続いて必ずしも天下は安定しなかった。行き過ぎて稀代の悪法の「生類憐みの令」もつくった。また、貨幣不足が進んだため貨幣の質を落とす改鋳を行った。宝永 6 年 (1709 年) はその綱吉が死去した年だが、この年の正月公演に江戸の三座（市村座、森田座、山村座）がそろって曾我ものを出した。宝永 4 年 11 月富士山噴火から各種の災難が江戸に始まり、大火、次いで干ばつ、疱瘡赤痢の流行などが続き、最後に宝永 6 年正月 9 日綱吉が急逝した。丸谷氏は、十郎五郎の怨恨が大火と生類憐みの令と悪銭から江戸を救い、曾我狂言が征夷大将軍殺しの祭祀になった、と解釈した。

### (3) 御霊信仰を動機にした祝祭としての忠臣蔵

ところで、丸谷はその忠臣蔵論の冒頭で、義士が討入の際に着ていた火事装束に注目している。あの法被<sup>はっぴ</sup>のようにも軍装のようにも見える白と黒の山形模様の揃いのユニフォームは加賀の前田家の火事装束で、大名火消しの伝統を持つ浅野家をシンボライズしたものである。

江戸時代の庶民が怖がった災害に「地震、雷、火事、親父」の五つがあった。その中の親父というのは「お上、当局」という意味もあり、庶民にとって天災地変、飢餓、疫病、火事と並んで悪政もまた天災と同じくらい困りものだった。幕府の重税と悪法に屈服し忍従を続けながら、いつの日か悪霊の祟りが猛威をふるって悪政を倒す日が来るに違いない。江戸の庶民から、その権力を倒す人に想定されたのが忠臣義士だった。

御霊信仰のもとで悪霊の祟りを治める呪術的演劇を演じる人々の衣装にはつぎのような要件が求められた。

- 夜盗のように生々しい服装でなく浄瑠璃や歌舞伎の様式に沿ったものであること
- 大乱をほのめのかし十分戦闘的であるが、幕府の検閲で言逃れ可能であること
- 47 名全員の統一感や集団性を象徴するユニフォーム（制服）であること

これらを満たす衣装として火事装束が選ばれたに違いない。

カーニバル（祝祭）は、リオデジャネイロ、ニース、ニューオーリーonzなどで有名なカトリック教国の春の祭りで、何日間かにわたり行列、仮装、見世物を繰り返してバカ騒ぎ

する祭りである。このカーニバルは、冬が滅びて春が来たことを祝う行事である。カーニバルの王は冬の象徴で、一旦王冠を奪われるけれどもまた春が来て再び王位に就く。

丸谷氏は「仮名手本忠臣蔵」もこのカーニバル型の祭りと同じ構造と考える。高師直が冬の王で、塩谷判官が春の王だったが非業の死を遂げる。その高師直が仇討によって王冠を奪われる。一力茶屋がバカ騒ぎで、「道中旅路の花婿」（三段目）と「道中旅路の嫁入り」（八段目）が音楽と踊りで、「花水川引揚げ」（大詰）をパレードと読み替えることができる。さらに、忠臣蔵は2月に始まって12月に終わる。事件は2年にわたる物語だったが、塩谷判官の切腹とお軽勘平の道行が春に始まって冬に高師直の打首で終わる筋立ても四季の移り変わりを祈ったものだった、という。

私にはかなり牽強付会に見えるのだが、丸谷氏はにやにやしながら、あの祭りとこの演劇はいよいよ似てくる、と得意げである。しかし丸谷氏は、忠臣蔵とカーニバルは酷似しているが、それでも同じものとは言わない。忠臣蔵は事件そのものも芝居もともに御霊信仰から生まれたものであるからだ。そしてもともと御霊信仰では不機嫌な亡霊を慰めるために、花や供物、お経をあげて祭祀する、歌や舞を演じる、相撲や流鏑馬の武技を演じる、大勢の見物人を集める、などの御霊会を行った。御霊会＝カーニバルはもともと祭りの基本形で、祭りの中に反乱の影さえも見ることができる。

#### （4）国文学者の反論

丸谷オ一の忠臣蔵論に対して、まもなく丸谷・諏訪論争とよばれる国文学者・諏訪春雄の反論が出された。その趣旨は、丸谷氏の論理では、江戸時代は怨霊が跋扈し、人々が悪政や天災に苦しみ、毎年春から体制転覆の呪詛劇を上演して時代に見える。それは江戸時代暗黒論であり、江戸時代に現代日本の故郷を夢見る私にとっては到底受け入れがたい、という基本的立場から、次のように反論した<sup>4</sup>。

- ① 江戸時代の曾我物が将軍殺し、体制呪縛性をもっていたという根拠を作品と享受者の意識の面から説明されたい、
- ② 曾我狂言の呪術性が浄瑠璃の「仮名手本忠臣蔵」に受け継がれた過程を証明されたい、
- ③ 日本で人民が昔から春の神を信じ権力者殺し、体制呪詛の御霊会＝カーニバルのような春の祭りをしてきた事実を証明されたい

諏訪は、作家である丸谷氏がかなり手前勝手にいくつかの思い込みに陥っているようなの

---

<sup>4</sup> 1 回目「御霊信仰と判官びいき」（雑誌「新劇」1985 年 3 月号）、2 回目「忠臣蔵のために」（雑誌「新劇」1985 年 6 月号）

でともかく実証的、具体的な証明を求めたのが特徴的だが、結局のところ、丸谷側からその反論は出されなかった。諏訪が考える忠臣蔵論の要点は、

- ① 近松の悲劇作品を日本的悲劇の典型と考えて、忠臣蔵の核心は「判官びいき」にあるとみる。
- ② 日本人の基本的な死生観には聖と俗の二元対立があって、俗的なものが生命を更新するには自分を犠牲にして聖的なものに接触しなければ永遠の生命を得られない、自身を犠牲することなしにはこの世に歴史的正義を実現できない。
- ③ 日本的悲劇は聖と俗の間を渡す「供犠」<sup>きょうぎ</sup>（いけにえ）によって解決されるというモデルである。

諏訪の論理では、聖と俗をつなぐ「供犠」に演劇の核心がある。丸谷氏は忠臣蔵をカーニバル的演劇とみなして演劇祭祀論を述べた。丸谷氏の目的は忠臣蔵を日本を代表する世界的演劇であるとして、忠臣蔵を世界演劇の中に位置づけようとした取り組みだった。これに対して、諏訪氏は古くから日本人の間で好まれていた忠臣蔵はやはり世界演劇の中には到底出すことができない日本固有のもので、供犠の形をとった宗教的儀式にすぎないと言っている。



三段目大星由良之助（産経新聞社）

### 第3章 赤穂事件と「仮名手本忠臣蔵」に先行した戯曲

忠臣蔵を読む場合、赤穂事件があった江戸時代の中の元禄時代をどういう時代としてみるかによって理解の仕方が異なってくることが判る。丸谷才一氏は怨霊が跋扈する暗黒時代と見ていたし、諏訪春雄氏は現代日本の故郷をみていた。確かに赤穂事件があり浪士が討入したのは元禄時代だが、これが戯曲として書かれて文楽や歌舞伎で上演されたのは約45年後で間もなく宝暦飢饉が始まろうとしていた頃である。それだけでなく、戯曲の中では赤穂事件は南北朝時代の事件で、南北朝時代と言えば下剋上が頻発した動乱時代の見本みたいな時代だった。だから、「仮名手本忠臣蔵」を単純に平和な元禄時代の戯曲と思い込むのではなく、そこで繰り広げられるドラマは下剋上や飢饉に苛まれた暗黒時代の影が強く反映されていることを考えながら読んでいく必要がある。

#### (1) はじめは関心と呼ばなかった赤穂事件

1701年3月に浅野内匠頭刃傷、その1年半後の1702年12月に赤穂浪士討入、翌1703年2月に浪士切腹と続いた一連の事件が「赤穂事件」である。これは2年の間にはっきりした起承転結が整った日本史上最大の仇討ち事件だった。後世の人々は、この事件が起きるや否や反響を呼び、浅野の切腹に寄せる同情と喧嘩両成敗をしなかった幕府の片手落ちの処分を非難する声が湧き上がり、「元禄の快挙」の声が地響きのように広がった。そのうねりは、江戸市中だけでなく、馬方や船頭が「浅野いとしや、吉良様憎し」と歌うほどで（真山青果）、地方へも瞬く間に広がっただろうと思っていた。

確かに、当時でもその経過や原因についてきちんと情報が出されていれば世間の耳目を驚かせ、人々の関心を大いに高めたと推定される。しかし、武家内部で起きたトラブルだったので、当然のことながら公表されず、闇情報か風説として伝えられたに過ぎなかった。

同時代の記録の一つに有名な「<sup>おうむろうちゅうき</sup>鸚鵡籠中記」がある<sup>5</sup>。これは名古屋城下の尾張藩士が書いた記録で、江戸藩邸からの情報として赤穂事件が登場する。それによれば、江戸で喧嘩があり、内匠は田村右京太夫に預けられてその夜切腹。殿中の喧嘩は是非を論じるまでもなく、先に刀を出した方が非分（道理に合わない）である、と後から3月14日のページに書き加えられている。記録には、さらに、城の明渡について、赤穂では領内へよそ者を入れず、幕府から脇坂淡路守と木下肥前守が行った。赤穂では大石内蔵助がもし喧嘩だったなら相手を無事にして置くわけにいかないが、殿中の狼藉だったので切腹させられたというので、誰に恨みをいうわけにもいかない、と家中の者を説得して、今月19日に無事城を受け取った云々（4月4日）、と書いている。「鸚鵡籠中記」では、赤穂事件に接した時、名古屋城下では「元禄の快挙」とか人々が熱狂したといった事態はなく、ほぼ無関心の状態だ

<sup>5</sup> 神坂次郎「元禄お豊奉行の日記」（中公新書、1984年）

ったといわれている。

ところが、45年後にこれが浄瑠璃や歌舞伎で演じられると、大評判になった。1748年に浄瑠璃「仮名手本忠臣蔵」が大阪道頓堀竹本座で初演、翌1749年江戸三座で歌舞伎として公演されると大きな評判を呼んだ。これ以降、忠臣蔵は出せばきつと大入り満員になる出し物として途切れることなく今日に至るまで上演され続けている。「元禄の快挙」で江戸八百八町が熱狂したと伝えられる赤穂浪士の討入（打込み）の華やかさは、後の歌舞伎や講釈によって飾り立てられた側面が大きい。一つの事件が長い間にわたり大勢の人々の心をうつ演劇として昇華されるのに45年もの時間が必要だったことを示すものであるが、同時に、その昇華期間の間に赤穂事件の姿もまた大きく変容した。

## (2) 吉良の首の話

赤穂事件が「仮名手本」でよく知られるようになると、赤穂事件そのものが様々に脚色されて、史実がだんだん薄れて不確かなものになった。たとえば、今尾哲也氏（玉川大学）は、①首の数②遺体の状況③首なし死体の状況④凱旋時の状況⑤墓前の行動⑥首は侮辱されたか⑦瑤泉院の行動⑧首の行方などについて興味深い言及をしている<sup>6</sup>。この論文から事件がどう変容していったかを窺うことができる。

浄瑠璃「仮名手本忠臣蔵」の元になったとされる「碁盤太平記」（近松門左衛門）では本首と偽首の2級あったと書かれている。また忠臣蔵のイメージを固めたとされる「忠臣金短冊」（並木宗輔）では横山郡司のほかにも小栗判官を抱きとめた土川兵庫も首をはねられて、2級あったとされている。さらに浪士たちの凱旋行列を見たという人々からは白小袖に包まれた首が3級あったというものもある。史実では浪士たちは確かに吉良本人の首を討ち取った。しかし後に書かれた戯曲や風説では、吉良本人だけでなくほかにも撃ち落した首があった、その首数も2級だった、3級だったと話が違っている。ここから果して浪士が撃ち落した首はいくつだったか、という面白い疑問が生じてくる。

大石が「打込」を目前にして滞在していた川崎の平間村から同志に送った書付で次のように言っている。

- 「1 <sup>こころざし</sup> 志 <sup>ぼくいち</sup> 之相手ハ、ト一、<sup>そうらえ</sup> 佐之助ニ <sup>いづれ</sup> 候 得者、同志何れも右兩人ニ <sup>つけ</sup> 目を付、<sup>ほか</sup> 外を <sup>かまい</sup> 構 不レ申候は、  
<sup>まぎれ</sup> 本人 紛、<sup>あけそうらわ</sup> 討ちもらし候事も可レ有レ候間、<sup>むくろ</sup> 打込み候は、<sup>つつみそうらうて</sup> 男女之無レ差別一人も不洩様ニ、何も  
心掛け専要ニ存候  
1 敵之印揚 候 者、<sup>あけそうらわ</sup> 首尾次第、その <sup>むくろ</sup> 骸 之上着をはき、<sup>つつみそうらうて</sup> 包 候 而、持参可申事  
1 御検分之方有之候節、<sup>つかまりたき</sup> 挨拶之事、此印は亡主之墓前へ持参 仕 度 存念ニ御座候・・・」

<sup>6</sup> 今尾哲也「吉良の首」（平凡社、1987年）

「<sup>ぼくいち</sup>卜一」とは上野介の「上」を分解した符号で、吉良<sup>よしひさ</sup>義央を指す。「佐之助」とは吉良の養子佐平衛<sup>よしちか</sup>義周を指す。この書付は吉良父子を討って首級を上げた時は、吉良義央の首のみ着衣に包んで泉岳寺へ運び、浅野内匠頭長矩の墓前に供える、という指示である。実際の討入もほぼこの通りに進んでいる。討入の目標は吉良上野介（義央）ただ一人である。義周は義央を討ち漏らした時の代替え目標だった。ところが風説では、その「義央オア義周」がいつの間にか「義央アンド義周」に代わっている。史実上は、吉良屋敷の惨状の報告で、次の通り、首なし死体は一体だけだったことが判っている。実際に義周は首取りどころか、殺されもしなかった。義周は、やがて遠流の判決を受けて領地を召しあげられて信州高遠へ流され、3年後に死去した。

上野介の遺体についても史実と違う風説が生まれた。遺体の検視記録がある。

- 1 首なし、軀斗有之、
- 1 両之手之内に1所宛、
- 1 膝頭右之方に2ヶ所、
- 1 左之股に1ヶ所、こむらに1ヶ所、右之通有之、
- 1 上野介刀、無銘、

脇差は見へ不申候由、吉良家来齊藤宮内岩瀬舎人左右田孫平衛、実検之衆中申達す。

義央の体には<sup>とどめ</sup>5か所の傷があった。喉に加えた止めの一刀は首を掻き落としたために遺体に残らなかったといわれる。風説では内蔵助が一太刀浴びせたとか、46人一人一人が交代で一太刀浴びせたなどの話が加えられている。

浪士が凱旋して引揚げる様子を見た人々の目撃談も首の数を増やす要因になった。



上図は、討入後の浪士たちの凱旋ルート図である。12月14日午前3時半頃に討入り、戦いは2時間ほどで終わった。午前5時半頃、浪士たちは回向院への立入りを拒まれる。そこで回向院の門前で、吉良家や吉良の親戚である上杉家の追手を待ちうけるうちに夜明けを迎えた。しかし追手の気配がないので、彼らは通行人が多い両国橋を避けて船で泉岳寺まで行こうとした。しかし、船が借りられず、朝日に照らされた雪道を歩いた。泉岳寺に到着したのは午前7時～8時頃だった。

浪士たちは返り血を浴びた着物で、手には袖印の布で包んだ槍や刀をもって行進した。その間、追手が来て戦いになるかもしれないし、義央の首を取り戻しに来るかもしれない、その時は偽首も必要ではないか、と浪士たちは強く警戒していた。またその行進を見た人々は、それが赤穂浪士とは分からず、武器を手にした凶悪者集団のように見えたのだろう。人々は恐怖して逃げ出した。目撃者たちの冷静さを欠いた精神状態の下で、白い布包みが幾つあったかの判断は当然のことながら分かれている。首2, 3級という目撃譚は、単に数の問題でなく、次いで首の内訳や浪士たちが首を取った理由を知りその意図を踏まえた尾ひれが付けられて広まったと思われる。

義士たちにとってみれば、亡君の敵は吉良上野介ただ一人だった。その吉良を討ち損じた場合の代替目標に吉良の養子・義周<sup>よしちか</sup>の首も計画していたかもしれないが、実際には、義周は討入の際に怪我はしたが殺されていないので、多分首は一つだったのだろう。ただ、義周は討入では命は助かったものの、不幸な運命になる。その後、「仕方不屈き」により諏訪屋敷へ預けられて信州高遠へ遠流になる。3年後病死し、死後も遺体は塩漬けにされて見聞の上埋められた、という。

また、討ち取られた上野介の首の行方について、義士たちは何はともあれ泉岳寺へ持参して浅野家の御墓所へ備えることが使命だった。泉岳寺の門前に到着すると義士たちは真直ぐ墓所へ向かった。義士たちが先に入り、見物人も次第に集まり出したので、寺側では門を閉めて義士たちが礼拝する間、読経した。墓前での手向けが終わった後、庫裡から重箱の外箱を取寄せてその首を納めて、終日衆寮に置いた、と言う（「白明話録」）。

この時の墓前の行動もまた様々に潤色されている。首を三方の上に置いて備えた、大石が祭文を上げて浅野の遺品の匕首を首に三度当てて首を掻く仕草をした、首を墓前に備えた後、取り出して踏み散し小刀などで突き散らした、さらに浅野の奥方瑤泉院が首検分のために寺へ駆けつけたという話まで作られた。その後吉良の首は、吉良屋敷へ送り返され、遺体に次ぎ合わされて、18日夜、吉良の菩提所の万昌院に葬られた。

### (3)「仮名手本忠臣蔵」の前に赤穂事件を扱った浄瑠璃

「仮名手本忠臣蔵」(1748 年)の作者は、二代目竹田出雲、三好松洛、並木川柳(宗輔)の合作である。中心になって書いたのは並木宗輔で、「太平記」巻 21「塩治判官惨死の事」を世界にしていることがよく知られている。忠臣蔵は「太平記」の世界に依拠した浄瑠璃として作られている。しかしこの傑作がはじめて「太平記」に依拠して作られた作品だったわけではない。本作品以前に次のように赤穂事件を扱った浄瑠璃、歌舞伎があった。

|                                            |                     |                |
|--------------------------------------------|---------------------|----------------|
| 「曙 曾我夜討」<br><small>あけぼのそがのようち</small>      | (?)                 | 元禄 15 年、1702 年 |
| 「東山栄華舞台」                                   | (?)                 | 元禄 15 年、1702 年 |
| 「兼好法師物見車」                                  | (近松門左衛門)            | 宝永 3 年、1706 年  |
| 「太平記さざれ石」                                  | (?)                 | 宝永 7 年、1710 年  |
| 「鬼鹿毛無佐志 鑑」<br><small>おにかげむさしのあぶみ</small>   | (吾妻三八)              | 宝永 7 年、1710 年  |
| 「碁盤太平記」                                    | (近松門左衛門)            | 宝永 7 年、1710 年  |
| 「尊氏将軍二代鑑」                                  | (並木宗輔)              | 享保 13 年、1728 年 |
| 「忠臣 金 短冊」<br><small>ちゅうしんこがねのたんざく</small>  | (並木宗輔)              | 享保 17 年、1732 年 |
| 「狭夜衣鴛鴦剣翹」<br><small>さよころもおしどりのつるぎば</small> | (並木宗輔)              | 元文 3 年、1739 年  |
| 「仮名手本忠臣蔵」                                  | (二代目竹田出雲、三好松洛、並木宗輔) | 寛延 1 年、1748 年  |

これらの先行作品は大きく二つに分けられる。

| 区分  | 書名                                                                                                | 浅野役  | 吉良役 | 準拠した世界   |
|-----|---------------------------------------------------------------------------------------------------|------|-----|----------|
| A 群 | 「東山栄華舞台」<br><small>おにかげむさしのあぶみ</small><br>「鬼鹿毛無佐志 鑑」<br><small>ちゅうしんこがねのたんざく</small><br>「忠臣 金 短冊」 | 小栗判官 | 横山  | 説教節「をぐり」 |
| B 群 | 「兼好法師物見車」<br>「太平記さざれ石」<br>「碁盤太平記」<br>「尊氏将軍二代鑑」<br>「仮名手本忠臣蔵」                                       | 塩谷判官 | 高師直 | 「太平記」    |
| その他 | <small>あけぼのそがのようち</small><br>「曙 曾我夜討」                                                             | ?    | ?   | 「曾我物語」   |

赤穂事件を戯曲化した作品で、今日私たちが容易に原典に接することができるものは、世話物で鳴らした日本のシェークスピア近松門左衛門が書いて 1709 年 6 月から上演された「碁盤太平記」である。この戯曲は、その前の月の 1709 年 5 月に興行した「兼好法師物見車」が、上下 2 巻の構成で作られる予定だったところ下巻が欠けていたところを補う役割もしているので、二つの書を一体のものとして読む方が合理的である。



まず「兼好法師物見車」。

鎌倉末期、足利尊氏の執権の高師直が天皇の皇女・卿の宮を嫁にしたいと望むが、嫌がる卿の宮が吉田兼好へ相談する。断りの相談を受けた兼好は、師直の侍従に塩治判官の妻が美人だと教えて、師直の気をそらすよう仕向ける。仕掛けがうまくいって、師直は侍従にその妻との仲立ちを頼むが、侍従が断るので侍従を殺してしまう。次にそれでも思いがかなわない腹いせで塩谷をイジめる。塩谷は足利家の御殿で師直に刃傷に及び、切腹させられる。兼好が責任を感じて出家し、わび住まいをしているところへ、塩谷の妻と家臣の八幡六郎が来て塩谷の無念を語り合う。そこへ師直の家来小林民部が襲撃するが、六郎が討ち取る。

1703年3月に赤穂事件で討入した浪士が切腹してからわずか3年後の1706年5月に、近松は、師直が塩治判官の妻に横恋慕してその夫の塩谷を陥れるという「太平記」の逸話に沿って赤穂事件を戯曲化した。しかし、この作品には眼目の討入がない。多分近松は赤穂事件を「太平記」に「世界定め」した戯曲にすることをはじめから構想していたのだが、当時の事件を戯曲化することを禁じていた幕府の検閲がどのくらい厳しく入って来るかということと、観客の受け具合がどうかというのを見計らっていたように見える。だからかれは翌月には早速その続編に「碁盤太平記」を作って、それには討ち入り場面をしっかりと挿入した。「碁盤太平記」のストーリーは次の通り。

「京都山科で大星由良之助と倅力弥は毎日遊び暮らしている。その屋敷に下男岡平がいる。岡平は高師直方の間者で、由良之助の動向を内通していた。ある日力弥がそれに気付いて岡平を斬る。苦しい息の下で、岡平は自分がもともと塩治判官に奉公していた足軽で、塩谷の無念を晴らすために師直に仕えて内情を探っていたが、逆に師直から由良之助をスパイするよう命じられてここへ来たなどと身の上を明かす。そこへ由良之助が現われて、岡平がスパイであることを知っていて、敵の目を欺くために偽情報を出していたという。最後に岡平は、碁盤上に基石で高師直屋敷の間取図を教えて絶命する。由良之助の祖母と妻は向後の憂いを発つように自害して由良之助親子を励ます。親子は鎌倉へ立ち、赤穂浪士は鎌倉稲村ヶ崎で勢ぞろいしてから屋敷へ討入り、師直の首をとった後、亡君の墓前に供える。その後浪士は公儀の裁きをまって切腹して果てる。」<sup>7</sup>

近松は、前作の「兼好法師物見車」で観客の評判の高さと幕府の検閲の緩さを確信して、ほぼ史実に沿ったドラマを作り上げた。ところがこの「碁盤太平記」も好評で幕府の検閲を受けずに無事興行することができた。近松はこの戯曲を、赤穂事件が武士の道徳を「弓とるものの身の習い」の精神を引き継いだ忠義心の物語で、仇討を胸に秘めた由良之助親子のいうに言われぬ苦悩のドラマとして作り上げた。これ以降、赤穂事件は「太平記」に「世界定め」するのが定番になったように思われる。

<sup>7</sup> 「碁盤太平記」から抄訳（日本古典文学全集「近松名作集」所収、河出書房、1954年）

ところで、並木宗輔は「仮名手本忠臣蔵」を書く前に「忠臣<sup>ちゅうしんこかねのたんざく</sup>金短冊」(1732 年)を書いている。その作品で彼が準拠した「世界」は「小栗判官」の世界だった。

「忠臣金短冊」(1732 年)は、小栗判官が横山のイジメに耐えかねて刃傷に及び、その罪で切腹する。家来の由良之助は 40 余人で横山屋敷を襲撃して主君の仇を討つというストーリーで、舞台を小栗判官の世界にしているが、そのストーリーは忠臣蔵に似ている。しかし、似ているところは一部分で、一段で判官が切腹した後家来の伝伍が悪罵に判官を乗せるように迫るが、判官が逆に悪馬を乗りこなして暴れる場面には「？」と思う。また二段目では浪人になった寺沢と勘平が二人で横山を討ちに行く場面があり、四段目では横山を討ちもらした勘平が廓通いに陥った由良之助を暗殺しようとして逆に討たれてしまうなどの話もあって、忠臣蔵とは別物のように思われる。

また、「曙曾我夜討」は、芭蕉の弟子の其角が近松門左衛門に出した手紙で、2 月 4 日に赤穂の浪士全員の切腹で事件は決着して、町の噂はこの人々のことばかり、様々な説が飛び交い、この人々こそ真の忠臣だ、などとにぎやかな最中に上演された。2 月 16 日から江戸中村座で「(曙)曾我夜討」が幕を開けたが、時節柄をわきまえて少しは慎めとばかりに三日後に上演差し止めになった、と紹介されている<sup>8</sup>(古今いろは評林 1785 年)。しかし、その公演の事実も脚本の所在も不明で、その内容を探る手段もないので検討できない。

これに対して、本山美紀子氏は、並木宗輔の忠臣蔵に対する太平記的世界というのは師直と顔世の間でやり取りされた贈答歌が登場する「尊氏<sup>たかうじ</sup>将軍二代鑑」(1728 年)と「狭夜衣<sup>さよころも</sup>鴛鴦<sup>おしどりの</sup>剣翹<sup>つるぎば</sup>」(1739 年)の二作によって確立されたのではないかと指摘している。「尊氏将軍二代鑑」をしてみる。

(初段) 征夷大將軍・足利尊氏<sup>よしのり</sup>の後継に長男・義詮<sup>ただよし</sup>が就任すると、尊氏の弟・直義が政權奪取を企てる。義詮の家臣・塩谷判官の妻かほよに右大臣・具親が思いを寄せる。

(二段) 他方、塩谷判官には岡崎の遊女・繁の井がいて、千代松という子もいる。一方、直義は奇病を患い、秘密裏に家臣の高師直が紹介した医師・和氣佐中<sup>わけのさちゅう</sup>の手当てで全快する。しかし佐中が奇病治療を自慢して他言したので、師直に捕まる。

(三段) かほよが花見で女占師と出会う。この占師は実は佐中の妻の侍従で、父が和氣伴良でかほよの姉だった。その侍従が師直に佐中の命乞いをする、と、師直はかほよを口説くことを条件に佐中を釈放する。しかし佐中はかほよが探す康綱で、姉妹が同じ男を夫にした事が判る。そこへ直義が謀反を起こし

<sup>8</sup>「古今いろは評林」(岩波文庫版「仮名手本忠臣蔵」に所収、1989 年版)

たと<sup>ざんげん</sup>讒言が広まる。これを佐中が讒言を帝へ報告しようとするので師直が佐中を斬る。その時佐中が塩治判官の義弟・高則で、さらに師直と従兄弟だったと判る。佐中は虫の息の下で、かつて契った女がかほよで、それを知ってわざと勘当されて放浪したこと、その放浪中に侍従と結ばれたと告白する。師直も主人直義の悪逆を思いとどまらせるためだったと詫げる。かほよと侍従の姉妹は比丘尼になる。

(四段) 比丘尼になった姉妹が岡崎の八橋村の喜作の家へ泊まる。その家には繁、その子の千代松、兄の喜作と母が住んでいた。三日目にかおよが苦しみだす。繁が実は繁の井で、かほよを嫉妬して呪い殺す祈りのせいだった。また喜作が近藤太郎で、姉妹の父・和気伴良を殺した敵だったことも判る。かほよが死に、近藤太郎と思って侍従が襖越しに突いた相手の繁の井も死ぬ。そこへ、八幡がやってきて、直義追悼に將軍・義詮が立ち、千代松を大将にして攻め込むという迎えに来る。千代松は八幡、近藤を従えて出陣する。

(五段) 戦いで義詮側が勝利する。敗れた直義方の師直は、直義の命乞いをする。右大臣・具親は遠流、直義は出家、師直は割腹する。

「尊氏將軍二大鑑」は、「太平記」巻 21「塩谷判官讒死事」に対応しており、太平記の流れを汲んでいる。三段目で、師直が塩谷の妻・かほよに恋文を送るが、かほよは「小夜衣」と書いた贈答歌の返事を返すだけで、夫の塩谷でなく、契りを結んでいた康綱に操を立てるように変わっている。もちろん、両者の対応関係は巻 21 の讒死だけに留まらない。巻 13、巻 16、巻 23、巻 26 など細かく挙げればきりがなが、太平記が各所にちりばめられているのである。しかし中には「太平記」と明確に違いを出している個所もある。「仮名手本忠臣蔵」では高師直は悪人であるのに、「尊氏將軍二大鑑」では忠義心の厚い武士という役柄で、しょうもない主人・直義であるが主人を犠牲をいとわず命をかけて守り抜く武士として描かれている。

#### (4)「世界さだめ」と「趣向」

「仮名手本忠臣蔵」は赤穂事件の芝居なのに、吉良や大石でなく高師直や塩治判官が役名になっている。同様に、「伽羅先代萩」<sup>めいぼくせんたいはぎ</sup>は伊達騒動なのに鎌倉の足利家の事件として描かれている<sup>9</sup>。これは歌舞伎や浄瑠璃の独特な作劇法である「世界定め」のためである。また、歌舞伎や浄瑠璃では、曾我兄弟やお染久松などを主人公にする芝居がいくつもあつた。同じ人が繰り返し新しい芝居に登場するのも、「世界定め」に関係がある。

江戸時代には庶民による御政道批判は許されなかったため、歌舞伎や浄瑠璃で政治にかかわる事件や人物を劇化するには、人々がよく知っていて且つ興味を持っている名高い伝説、

<sup>9</sup> 「伽羅先代萩」 先代の伊達騒動を鎌倉の世界に脚色したもの。「先代萩」は仙台名産の萩を表し、「伽羅」は伊達綱宗が伽羅の下駄で吉原へ通ったという巷説による。

歴史上の事件、人物の世界になぞらえて制作した。源頼光とその四天王による酒吞童子退治、曾我兄弟の仇討ち、源義経伝説、太閤記などが「世界」となり、その舞台の中で描きたい人物や事件を昔の話の後日譚や当世風の人や風俗を取り入れる工夫をして見せた。

「世界」は戯曲の背景となる時代あるいは特定の人物である。「太平記」「曾我物語」「義経記」がその例である。その「世界」は、強弱の差はあっても人々によく知られたもので、観客は新しい話であっても抵抗感なく劇中へ入ることができた。作者は、その「世界」に幾つもの新しい工夫を随所に織り込んだ。良く知られた話ばかりで新味が少なければ観客にすぐ飽きられてしまうからだ。この新しい工夫が「趣向」と呼ばれた。江戸期の戯曲は「世界」と「趣向」の組み合わせでできている。このことを二世並木正三「戯財録」(著者名は入我亭我入を使用、1801年)で次のように説明している。

「大筋を立つるに、世界も仕古したる故、ありきたりての世界にては、狂言には働きなし。筋を組み立つる故、堅筋、横筋という。たとえば、太閤記の堅筋へ石川五右衛門を横筋に入れる。白拍子公成、桜子桂子、家谷村六助など皆横筋なり。堅筋は世界、横筋は趣向になる。堅は序より大切まで筋を合わせても働きなし。横は中程より持出して働きのとなりて狂言は新しく見せる、大事の眼目なり。」

歌舞伎の「堅筋は世界、横筋は趣向」は、「世界」で堅筋の時間の変化、「横筋の「趣向」が空間の変化を起こすことを意味している。「世界」が決まると時代と一定の登場人物が決まり、「趣向」によって新たな創意、新鮮味を出すことができた。芝居が特定の「世界」に依拠する意義は、過去の時代を借りて現代の政道や風俗批判ができること、また、大筋が整っている「世界」に新しい趣向を盛り込んで複雑な筋の新作を発表できることにあった。芝居が特定の世界に拠ると言っても、時代考証などないので、中世の御姫様が江戸時代に登場したり、鎌倉に江戸の町があるなど実際の舞台では時代を超えた面白さもあった。

江戸時代には歌舞伎や浄瑠璃は必ず「世界」に則って作品が作られるという約束事が確立された。今と少し違うが、江戸時代中期から江戸では向こう一年間の興行の顔ぶれを定め、その一座で11月初めに「顔見世興行」を張るのに先立ち、9月12日に作者と座元と座頭が「境定め」という会合を持って、顔見世で上演する演目を決める習慣があった。今日にも「顔見世」興行は残されているが、歌舞伎の作劇上の約束事は江戸幕府が瓦解すると消失し、明治以降の新作は皆実名になった。忠臣蔵や河内山宗俊、水戸黄門などもみんな実名で登場し、場所も実際の通り描かれるようになっている。

## 第4章 赤穂事件を「太平記」の世界で劇化

ここで、「仮名手本忠臣蔵」を「豎筋は世界、横筋は趣向」に分けて読んでゆくことにする。そうすると、「豎筋」に当たる「世界定め」、それにより指定された「太平記」から何を作者や演者たちが取り出しているかを探り見極めることができる。

赤穂事件は、「太平記」を「世界」とする「仮名手本忠臣蔵」に生まれ変わった。赤穂事件という素材が「太平記」の時代の出来事として描かれた。「太平記」では鎌倉幕府が崩壊した後醍醐天皇による王権復古の活躍が描かれている。しかし、後醍醐天皇の活躍は一時的で、やはり武士階級の力が時代の趨勢だったので、弱体な天皇家は南北朝に二分されて衰退し、次に武家の足利義満が室町幕府を立てていく。江戸期の「パクス・トクガワナーナ」の平和のもとで天下泰平の気分を堪能していた人々が、300年も前の南北朝時代の動乱を描いた「太平記」の中から「仮名手本忠臣蔵」で何をしようとしていたかという問題はなかなか興味深いところである。しかし、ここでは「仮名手本忠臣蔵」が「異形の王権」と伝えられる御醍醐天皇の時代を舞台に選んだ意義と効果について検討する。そして何を戯曲に取り込んで「豎筋」にしたかも検討する。

### (1)「世界」としての太平記

江戸時代の人々にとっては「太平記」の話はとてもよく知られていた話だった。江戸時代には「太平記読み」（講釈）が広く行われ、講談や芝居を通じて楠正成のエピソードなどは当時の誰もが知っている話で、江戸の人々の倫理観の根本をなすほどだった。特に楠正成・正行親子が「太平記」でも最も好意的に書かれていて、正成の天皇に対する忠義、正行の母に対する孝行心は「忠孝」の理想像として江戸の人々に行き渡っていた。

赤穂事件は当初とりたててあれこれ噂になるような事件ではなかった。しかし、赤穂事件終結のわずか2年後の1706年に赤穂事件を素材にした「碁盤太平記」が初演されると様子が変わってくる。ここでは作者の近松は、浅野内匠頭を「赤穂の塩」繋がりで「太平記」の塩治判官、吉良上野介を高家筆頭職（幕府儀典係の筆頭）繋がりで高師直に見立てて、赤穂事件の吉良と浅野の対立が「太平記」の高師直と楠の対立に置き換えられた。近松は。最後に「太平記」にはなかった楠側が大願成就する話としてまとめるのだが、江戸の人々は楠の仇討成就の話には敏感に反応して、評判を呼ぶ芝居になった。

「太平記」は鎌倉時代末期から書き起こされ、南北朝を経て足利義満による天下平定に至る50年間の軍記物語である。鎌倉時代末期の1324年、後醍醐天皇が討幕計画を立てるが、内通されて失敗する。その後、楠正成らの活躍で鎌倉幕府が滅亡し、後醍醐天皇の「建武

の新政」が始まる。まもなく足利尊氏が離反して、政権が南北朝へ分裂して、1338 年足利尊氏が室町幕府を立ち上げる。後醍醐天皇が崩御し、足利政権の内部抗争が続発するが、1368 年、幼い将軍・義満が征夷代将軍に就任して終わる。

その後室町時代中期頃から、源平が交代で政権をとるという源平交代思想（説）が武家の間で語られるようになる。この思想は中国の易姓革命説にもとづく考え方で、天下を治める者はその時代に最も徳がある人物がふさわしい、徳がない治者は打ち倒されるべきであるとする。この易姓革命思想にもとづいて、実際の政権交代を源平交代とみた。

- 平氏政権（平清盛の一族）・・・・・・・・平氏
- 鎌倉幕府（源頼朝の一族）・・・・・・・・源氏
- 鎌倉幕府（北条一族）・・・・・・・・平氏
- 室町幕府（足利一族）・・・・・・・・源氏
- 織田政権（織田信長～豊臣秀吉）・・平氏
- 徳川幕府（徳川家康の一族）・・・・源氏

「太平記」も、その冒頭で、優れた君主（天皇）は徳を体して国家を治め、優れた臣下は仁を施して民を憐れむとし、もし君主に天の徳が欠けている時は帝位を保持できないと易姓革命思想にもとづく考え方を示している。実際の政治をみると、95 代目の後醍醐天皇は天皇としてもつべき徳を欠き、執権の北条高時は臣下の持つべき礼を欠いた。だから「太平記」では、従前の政権だった北条氏が滅亡すると、一時的に後醍醐天皇が政権につくが、天運にも見放されて都落ちして吉野へ移る。その結果、朝廷も南北朝に分裂し、天下は大乱に陥ったと展開してゆく。

この話のヒーローは楠正成と後醍醐天皇である。楠は御醍醐天皇に拔擢されて登場し、後醍醐天皇に忠誠を誓い、尽くした。色んな合戦で機略に富んだ智将ぶりを発揮する。しかし、九州へ逃れた足利尊氏が京都へ攻め上る途中の兵庫・湊川で、正成は新田義貞とともに足利軍を迎え撃つことになる。負け戦になろうと予感した正成は、兵庫へ向かうに先立って愛息<sup>まさつら</sup>正行に「桜井駅の子別れ」で遺言を残し、湊川の戦いで弟正季<sup>まさすえ</sup>と刺し違えて自決する（16 巻）。その正成とともに歩んだのは後醍醐天皇である。しかし、この二人も早々と前半で、全 40 巻中の 16 巻で正成が、21 巻で後醍醐天皇が死去していく。もちろん後半でも、正成が千の頭を持つ悪鬼となり（23 巻）、後醍醐天皇が火焰を吹く大魔王となって（34 巻）、現世に残した怨念を晴らすために魔界から再登場するが、最早、主役ではない。

「仮名手本忠臣蔵」の高師直と塩治判官の確執は「太平記」の中では全 40 巻中の 21 巻に登場する。まず高師直。

楠正成や新田義貞らが討たれて南朝が衰退すると、次に足利家を中心とした北朝が優勢になった。1338年足利尊氏が室町幕府を開くと、高師直は、戦争に強い武人として華々しい活躍をみせる。彼は、和泉堺裏で北畠顕家を討ち（1338年）、四条畷の戦いで楠正行、正時兄弟を討ち（1348年）、次いで吉野山を攻め、南朝を賀名生（奈良五条）へ撤退させた。他方で、高師直は將軍家の執事としても権勢をふるう。はじめ幕府内部では將軍の尊氏と政務を仕切る弟直義の足利兄弟の二頭政治が行われていたが、次第に両者の対立が激しくなり、直義が尊氏の側近高師直の執事解任を引き起こす。解任された高師直は怒り、弟・師泰と挙兵し直義を襲撃する。この闘争を兄尊氏が周旋し、直義は出家、幕府内の直義勢力の一扫で終結した（1349年）。

足利直義の出家後、高師直は尊氏の子・義詮を補佐して引き続き幕府の実権を握る。出家した直義は翌年には南朝側へ寝返る（1350年）。翌1351年、南朝と直義らは高師直を倒すために挙兵し（「観応の騒乱」）、摂津・打出の浜の戦いで足利尊氏、義詮、高師直軍を破る。尊氏は高師直兄弟の出家を条件に和睦するが、高師直兄弟は摂津から京都へ護送中武庫川で殺害される。その後南朝は勢いを盛り返すが、直義が再度北朝側へ寝返り、東国支配に乗り出すと言って鎌倉へ行く。その間に尊氏は南朝と妥協し、直義討伐の綸旨<sup>りんし</sup>をえて鎌倉を攻め落とし直義を幽閉の上毒殺してしまう。

さて、このように「太平記」における高師直は、後醍醐天皇崩御後、足利尊氏と一緒にあって北朝を支えた大人物だが、師直の横暴さを象徴するものが、塩冶判官が幕府転覆の陰謀を計画していると足利尊氏に諫言<sup>かんげん</sup>して塩谷一家を滅亡させた事件である（21巻）。「太平記」では、権力者師直による塩谷の妻への激しい横恋慕のために塩冶一家が悲劇に陥る。

高師直が酒宴で平家琵琶を聞くうちに、源頼政が紫宸殿のヌエ退治をした褒美<sup>あやめ</sup>に菖蒲御前という美女を得た話が話題になり、褒美には美女がいいか領地がいいかの議論になって師直は美女がいいと主張。すると、今の宮中には菖蒲御前以上の美女がいる、その姫は今は塩冶判官の北の方（妻）だと聞くと、師直の北の方への思いが一層募った。初めは侍従を通して北の方に一夜の相手を懇願するが拒否される。次いで兼好法師に恋文の代筆をさせるが、開封もせず庭に棄てられる。そこで侍従は北の方の風呂上がりの姿を見せて師直の熱を冷まそうとしたが、実際に見ると逆効果で妖艶な色香に魂を抜かれてしまう。ここに至って、これまで恋の仲介役をしていた侍従は恐怖のあまり屋敷から逃げ出してしまう。そこで、師直は塩冶判官の幕府転覆計画をでっち上げて、塩谷討伐を仕掛ける。危険を察した塩冶判官は、妻子を自国の出雲へ帰国させる。自らもまた別ルートで帰国する。しかし妻子一行は間もなく討手に追い付かれて山城国で全員が自害した。何とか出雲へたどり着いた塩冶判官は妻子の死を知らされて、七たび生まれ変わっても師直に恨みを晴らすと言って馬上で切腹した。高師直の色欲の果てに毘にはめられて塩冶判官は一家もろとも抹殺されてしまった。もちろん師直の色欲も決して満たされることはなかった。

## (2)「異形の王権」としての後醍醐天皇と建武の新政

「太平記」は、後醍醐天皇の「建武の新政」が3年間で破たんし、以降、南北朝の動乱が続く時代を詳しく描いている。「建武の新政」(1334年～1335年)は武家政治に反対し天皇中心にして貴族や寺社の利益を優先する政治を行った。しかしその政権の一角を担った足利尊氏が反乱を起こして政権離脱すると新政も崩壊した。その後醍醐天皇の行動を年表にする。

後醍醐天皇関係年表

| 西暦    | 年齢 | 内 容                                                                                                                                      |
|-------|----|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1318年 | 30 | 後醍醐天皇が即位。父の後宇多天皇が上皇となり、院政を始める。                                                                                                           |
| 1321年 | 33 | 父の後宇多上皇が院政をやめる。後醍醐天皇が直接政治を始める。                                                                                                           |
| 1324年 | 36 | 後醍醐天皇が正中の変をおこす。 <sup>10</sup>                                                                                                            |
| 1331年 | 43 | 後醍醐天皇が元弘の乱をおこす。 <sup>11</sup>                                                                                                            |
| 1332年 | 44 | 後醍醐天皇が鎌倉幕府にとらえられえ、隠岐島(島根県)に流される。                                                                                                         |
| 1333年 | 45 | 鎌倉幕府が滅びる。                                                                                                                                |
| 1334年 | 46 | 後醍醐天皇が建武の新政を始める。 <sup>12</sup>                                                                                                           |
| 1335年 | 47 | 足利尊氏が後醍醐天皇にそむき、反乱。<br>新田義貞、楠木正成、北畠顕家の活躍で、足利尊氏をやぶる。<br>九州でから足利尊氏が再び京都攻撃し、今度は後醍醐天皇軍がやぶれる。<br>後醍醐天皇が京都から比叡山にのがれる。<br>後醍醐天皇が足利尊氏に降伏し、京都にもどる。 |
| 1336年 | 48 | 足利尊氏が京都で光明天皇を天皇にする。(北朝)<br>捕らえられていた後醍醐天皇は、吉野(奈良県)にのがれる。(南朝)                                                                              |
| 1338年 | 50 | 足利尊氏が征夷大將軍に任命。<br>足利尊氏が京都に室町幕府を開く。                                                                                                       |
| 1339年 | 51 | 後醍醐天皇、吉野で病死                                                                                                                              |

2度にわたって討幕を図ってきた後醍醐天皇は、1334年に念願の政権奪還を果たす。武家政治で圧迫されていた貴族が150年ぶりに政権を取り戻した出来事だった。後醍醐天皇は、

<sup>10</sup> 正中の変 後醍醐天皇は頭がよく、統率力があつたため、朝廷の貴族の間から朝廷の権力を取りもどしてくれると期待された。後醍醐天皇は、貴族たちと鎌倉幕府をつぶす計画(第1次倒幕計画)を立てたが、その計画が鎌倉幕府にもれ失敗する。後醍醐天皇は鎌倉幕府の追求をのがれるが、計画に参加した貴族は罰せられた。

<sup>11</sup> 元弘の乱 後醍醐天皇は、再び貴族たちと鎌倉幕府をつぶす計画(第2次倒幕計画)を立てたが、その計画が鎌倉幕府にもれ失敗する。後醍醐天皇は笠置山(奈良県)にのがれ、立てこもる。鎌倉幕府軍は20万以上で笠置山を攻撃したため、後醍醐天皇は敗れる。

<sup>12</sup> 建武の新政 後醍醐天皇が行った天皇中心で、貴族や寺院の利益を考えた政治。武士の不満が高まった。



就任に当たって天皇親政、王道政治の理想に基づき「延喜、天<sup>えんぎ</sup>歴<sup>てんりやく</sup>の治への回帰、律令政治の基本への回帰」をスローガンに掲げた。彼の治世は、武家政権を打倒して元号を「建武」に改め、天皇中心の公家政権の再興を目指したという意味で「建武の中興」と呼ばれることになる。

「延喜・天暦の治」とは、平安中期の醍醐、村上天皇の治世を神聖化したもので、天皇親政による王道政治のメ<sup>比</sup>タ<sup>喩</sup>ファーとして用いられている。その王道政治の基本に基づいて後醍醐天皇は、武家政権を否定するとともに、先例重視だった貴族政治の慣習を改め、院政や摂関を廃止した。また政治機構についても中央機関に記録所などを設置し、論旨に絶対的効力を持たせるなど天皇中心の専制政治を行った。その改革が急進的で、武士だけでなく貴族の間でも不安が広がった。政権中枢にいた北畠親房は、平安朝の貴族社会では「先例に倣う」ことが政治の在り方だったので、後醍醐天皇の改革は積年の弊害を一掃するチャンスだったが、武士による荘園侵略をやめさせるところか、勲功重視のため武士への恩賞としてもともと貴族の持っていた土地まで与えてしまい、貴族を窮乏させ、由緒ある家も名ばかりになってしまった。勲功によって公家、武家を問わず登用されて天皇の側近が政治を墮落させたと述べるほど周囲を不安に落とした。（「神皇正統記」）。

後醍醐天皇の急進的な政治改革の例に、「旧領回復令」（1333 年 6 月）がある。この法は、鎌倉時代からの土地所有権を認めず、今後は後醍醐天皇の<sup>りんじ</sup>論旨のみが土地の正当な所有権を保証すると宣言した。これは武家政治の終焉により天皇の論旨が唯一絶対の権威の源泉であることを天下に知らせるものだった。このため、当時は土地が富の源泉だったので、日本中の武士が後醍醐天皇に忠誠からの本領に対する領有権をそのまま認定（「本領安堵」とよばれた。）してもらうために、続々と京都へやって来た。当然ながら、全国の所領問題を後醍醐天皇一人で処理できるわけではなく、翌月の 1333 年 7 月「諸国平均知行安堵法」を出し直して、所領の領有権すべてを天皇が裁決するのでなく各地の国司に委任すると変更した。次いで領有地の所有権紛争の訴訟も朝廷が扱うのをやめたので、武士の新政に対する不満が一層強まった。

「建武の新政」の政治機関については、中央組織に新政の中枢となる記録所、各地の所領紛争を解決する雑訴決断所を置き、地方には公家の「国司」と武家による「守護」が置かれた。

#### 1. 中央組織

- ・記録所・・・重要政務を行う最高決定機関。
- ・恩賞方・・・恩賞（要するに褒美ね）を担当。
- ・<sup>ざっそけつだんじょ</sup>雑訴決断所・・・所領をめぐる事務や裁判を担当。
- ・武者所・・・京都の警備

## 2. 地方組織

- ・鎌倉将軍府・・<sup>なりよしんのう</sup>成良親王（後醍醐天皇の子）、<sup>あしかがただよし</sup>足利直義（足利尊氏の弟）のコンビで  
関東の政務を担当。
- ・陸奥将軍府・・<sup>のりよしんのう</sup>義良親王（後醍醐天皇の子）、<sup>きたばたけあきいえ</sup>北畠親房（北畠親房の子）のコンビで、  
東北の政務を担当。古来以来の東北の拠点である、多賀城に設置した。
- ・国司と守護・・・知行国制を廃止して国司を置き、守護ともに全国に両方設置。

後醍醐天皇が考えた支配機構は、天皇とその手足になって動く官僚組織からなる専制国家機構だったので、長く続けられていた官職の世襲制を支えた「<sup>かんじうけおいせい</sup>官司請負制」と位階と官職の一致を慣例化した「官位相当制」が廃止されて、家柄にこだわらない有能な人材の登用が図られた。人事面でも御醍醐天皇に近い人々がどんどん出世する情実人事を行った。これらの知行国制の否定や官司請負制の廃止などの急進的な改革や片寄った人事は、公家や寺社の既得権益を侵した。こうして、建武の新政はわずか3年の間に、公家、武家、民衆の各層から不満が出されるようになった。

1334年11月後醍醐天皇の息子<sup>もりよし</sup>護良親王が足利尊氏と対立し、<sup>なりよし</sup>成良親王（後醍醐天皇の息子）と<sup>ただよし</sup>足利直義（足利尊氏の弟）が治める鎌倉へ幽閉される。翌1335年6月公家の西園寺<sup>きんむね</sup>公宗が北条泰家と結託して後醍醐天皇暗殺計画をたてるが、事前に漏れて失敗<sup>13</sup>。公宗が匿っていた北条泰家（高時の弟）はかろうじて難を逃れて、全国の北条家の残党に決起を呼びかけた。それを受けるようにして、7月諏訪の北条時行（高時の息子）が挙兵。当時鎌倉は足利義詮（尊氏の息子）が支配していたが、諏訪から出発した時行軍はこれを撃破して鎌倉入りした。北条時行の反乱を知った足利尊氏は、時行討伐のため後醍醐天皇に征夷大将軍の職を求めたが、勅許されなかったため、そのまま鎌倉へ出陣した。三河で逃げる途中の直義と合流して鎌倉攻めをして、8月鎌倉を奪還した。

鎌倉の足利尊氏に後醍醐天皇は帰還命令を出す、尊氏は無視。尊氏離反により、11月後醍醐天皇は新田義貞を尊氏討伐に向かわせる。尊氏はまず箱根竹の下の戦いに勝利し、京都へ攻め込み、12月に一時は占領する。ところが、尊氏討伐で挙兵した陸奥の北畠親房が、足利軍を猛攻したため、尊氏は一時九州へ逃れる。しかし尊氏は2ヶ月後に勢力復活。その時、持明院統<sup>14</sup>の光厳上皇から「新田義貞を討伐せよ」の院宣により尊氏は朝敵ではない証明を得て、勢いを得た足利軍は、多々良浜の戦いで菊池武敏を破ると、一気に中国地方

<sup>13</sup> 中先代の乱 北条時行の政権をいう。鎌倉時代の北条氏（つまり先代）と、尊氏の政権の間に存在したので「中先代（なかせんだい）」。そこでこの動乱を中先代の乱とよぶ。たった20日ぐらいの栄光だった。

<sup>14</sup> 鎌倉幕府の調停によって、本来は持明院統と太皇太后統から順番に天皇が即位することになっていた。しかし1331年に後醍醐天皇が鎌倉幕府転覆クーデターを起こしたため、鎌倉幕府は持明院統光厳天皇を即位させた。ところが、後醍醐天皇はこれを認めず天皇私ただ一人と主張。天皇が2人いる状況になった。ここから南北朝時代の始まりとする分類も可能である。

から畿内へ入り湊川の戦いで楠木正成を戦死させて新田義貞も撃破。京都を占領し、後醍醐天皇から、天皇の証である三種の神器を取り上げ、光厳上皇の弟を光明天皇として即位させた。こうして王権が二つに割れた南北朝が成立した。

後醍醐天皇は、本来天皇の名前は死後に決められてきたが、「醍醐天皇や村上天皇の頃の天皇自らが政治をする時代に戻したい」と熱望し、自分から「後醍醐天皇」を名乗った異色の天皇である。尊敬する醍醐天皇の後継者を自称した。また、後醍醐天皇は、「幕府は、私の指揮下にあるべきだ。従わないなら滅ぼす」と、血気盛んで、吉田定房、北畠親房<sup>きたばなちかふさ</sup>、日野資朝<sup>ひのすけとも</sup>などの人材を確保したうえで、王朝政治を復活しようとした。

### (3) 太平記の世界は婆娑羅<sup>ぼさらか</sup><sup>15</sup>の世界

鎌倉幕府が滅んで後醍醐天皇が彦根から戻ったのが 1333 年 6 月で、1336 年 5 月には足利尊氏により京都を追われたので、公家一統の時代はわずか 3 年間に過ぎなかった。しかし、そのわずかな期間は、後醍醐天皇の政府が王権による専制政治で混乱を引き起こしただけでなく、1335 年 7 月の「中先代の乱」以降政府が倒壊するまで日本中を権力闘争の混乱に巻き込み、まれにみる異常な事態となった。

1335 年の「中先代の乱」を皮切りに京都から尊氏が東下して鎌倉を奪還。さらに新田義貞も東下するが逆に尊氏に撃破されて、敗走する義貞軍を追って尊氏・直義軍が上京する。その後ろを東北から来た北畠顕家軍が追走する。鎌倉から京都までの東海道を三つの大軍が次々と上京した。さらに一旦京都に入った尊氏・直義軍は義貞・正成・顕家軍に包囲されて敗北し九州へ逃れる。一旦九州で体制立て直しを図った尊氏は再度西から上京し、兵庫で義貞・正成軍を破って再入京を果たす。東北へ帰っていた顕家軍は戦況を聞いて再び上京するが、1338 年に畿内で敗北する。

御醍醐の王権が 3 年で崩壊して、1335 年から 1338 年までの 4 年間に、東北、東国、西国、北陸、九州など日本中を大軍が駆け巡り、合従連衡の戦争絵巻のような混乱を生み出した。日本中を動乱に巻き込んだ要因は、後醍醐天皇の妄執にあったことは確かだが、しかしながら、それと同時に日本の社会が中世から近世へ大きな転換期に差し掛かっていて、王権も武家も庶民も変質を迫られていたためではないかと思われる。

「建武の新政」が始まってすぐ 1334 年 8 月に、天皇政府があった二条富小路の近くの鴨川の川原に「二条河原落書」が立てられた。「比比都ニハヤルモノハ」の書き出しで始まる「落書」は、七五調で「建武の新政」に対する京都の民衆（京童）による風刺や揶揄が書かれ

<sup>15</sup> 婆娑羅 室町時代の流行語。狼藉を働くなど遠慮なく振舞うことや派手に見栄を張ることを意味した。

た、とよく言われるが、建武政権批判にとどまらず中世社会で武士や経済力をつけた庶民が台頭してきて新たな文化や風習までも生まれつつある混乱期に対する鋭い批判を展開しているように思われる。

冒頭には、後醍醐天皇が始めた急激な諸改革で世の中が混乱している様子が書かれており、その中に所領安堵に関する混乱も登場する。

|                                                                                                     |                                                                                                                            |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| このごろ<br>「此比都ニハヤル物<br>めしうど そらさわぎ<br>召人早馬虚騒動<br>にわくだいみよう<br>俄大名迷者<br>本領離ル、訴訟人<br>ついしょうざんにん<br>追従議人禅律僧 | にせりんじ<br>夜討強盗謀綸旨<br>なまくび<br>生類選俗自由出家<br>そらいくさ<br>安堵恩賞虚軍<br>もんしよ ほそつづら<br>文書入タル細葛<br>なるづもの<br>下克上スル成出者・・・・」(以下「三条河原落書」から抜粋) |
|-----------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

「本領離ルル訴訟人 文書入レタル細葛」とは、自分の領地に関する書類をカバンに入れて上洛する武士がこの頃増えてきたという意味である。

|                                     |                                                       |
|-------------------------------------|-------------------------------------------------------|
| 「京鎌倉ヲコキマセテ<br>在々所々ノ歌連歌<br>譜第非成ノ差別ナク | 一座ソロハヌエセ連歌<br>てんしゃ<br>点者ニナラヌ人ソナキ<br>自由狼藉ノ世界也・・・・」(同上) |
|-------------------------------------|-------------------------------------------------------|

「落書」に描かれた新しい世界は、これまでの伝統的な「譜代の秩序」(代々その家の系統を継ぐこと)が壊れ始めて「自由狼藉」と呼ぶしかない混乱が始まった。ここでは事例として連歌の世界があがっているが、「落書」のすぐ上でほかの世界のことが書かれている。「はやりのバサラ扇は今までにない五ツ骨。大きな輿に乗る方も、痩せぎすの駄馬に乗る人も、上着は流行りの薄小袖。日々の食料買うために、古い鎧は質に入れ、武士は馬にも乗らないで、内裏行くのに駕籠で行く。身分上下の区別なく、大口袴が大流行り、生地は精好の高級品。鎧兜は捨てないが、弓も引けなくなっていて、犬追物をすれば落馬の回数ばかり多すぎて、矢を射る数を超す始末。誰に師事するわけではなく、笠懸辺りで大流行、皆自己流の形だけ・・・」

|                          |                                 |
|--------------------------|---------------------------------|
| 「非職ノ兵仗ハヤリツ、<br>花山桃林サヒシクテ | 路次ノ礼儀辻々ハナシ<br>牛馬華洛ニ遍満ス・・・・」(同上) |
|--------------------------|---------------------------------|

京都の町の風景も昔に比べて大きく変わった。関東から足利、新田、東北から北畠の武士団が来て、常駐するので、さながら軍事都市のようだったのだろう。他方で、「建武の新政」の功で後醍醐天皇から莫大な恩賞を得た千種忠顕などは家臣らとともに日夜酒宴に明け暮れた。宴に集う者は300人を数え、興が乗ると数100騎を従えて、豹や虎の皮

をつけた金襴刺繍や絞り染めの直垂を着て上京や北山へ繰り出し、犬追物や鷹狩に没頭した。また、文観のように参内の時でも輿の前後に数百騎の堀に囲まれて街を横行した人もいた。

「天下一統メツラシヤ

御代ニ生テサマ々々ノ

事ヲミキクソ不思議共

京童ノロスサミ

十分一ソモラスナリ」

(同上)

「落書」の最後は、「建武の新政」を急激な復古主義を掲げる独裁政権が下剋上の社会を生んで、混乱をもたらした事例とし、「建武の新政」を珍しく不思議な時代だったと総括している。要するに、作者は、武士には「武士の武士による武士のための政権」が必要なのだと言っているように見える。しかし、この下剋上の流動化した社会は近世の初めまで続いていくことになる。

太平記の魅力の一つは後醍醐天皇をはじめユニークでエネルギッシュな多彩な人々が次々登場することだろう。しかも、多彩な人材が特定の支配者層だけでなく、幅広い社会層から登場している。この時代のユニークな人物像の特徴は「婆沙羅」である。

「この頃、殊に時を得て栄耀人の目を驚かしける佐々木佐渡判官入道道<sup>どう</sup>誉が一族若党ども、例の婆婆羅に風流を尽くして、西郊・東山の小鷹狩して帰りけるが、妙法院の御前をうち過ぐるとて、後に下がりたる下部どもに、南庭の紅葉の枝をぞ折らせける・・・折節、御門徒の山法師、あまた宿直して候ひけるが、「憎い奴ばらが狼藉かな」とて、持ったる紅葉の葉を奪い取り、散々に打擲して、門より外へ追い出す。道誉これを聞いて「いかなる門主におわせよ、この頃、道誉が内のものに向かって、さよいうのこと振る舞はん者は覚えぬものを」と怒って、自ら三百余騎の勢を率し、妙法院の御所へ押し寄せて、すなわち火をぞ懸けりたる」(21 卷)

折からの風で火は四方へ広がり建仁寺まで延焼。夜半の京都市中は騒然となる。道誉の放火に怒った比叡山は日吉神社の神輿を皇居へ担ぎ込んで強訴しようとした。ついに幕府も事態の重大さを知り、道誉を上総へ流刑にした。しかし、流刑地へ向かう道誉一行は、皆猿皮を背中の矢入れに懸け、猿皮の腰当をして日吉神社の神の使いの猿に反抗する衣装を着た若者たちに見送られるなどの歓迎を受けた。さらに道誉は、罪人であるのに道中で酒宴をはり遊女と遊んだ。道誉やそれを見送った若者たちは、バサラづくめの一団だった。



図3 異類異形の人々（「融通念仏縁起絵巻」）。

異類異形とは妖怪、鬼などの形容に使われたが、鎌倉後期以降、人間の服装、姿態について差別的な意味で用いられた。室町期には「悪党」と呼ばれた正体不明な人々が京の町を横行した。頭に烏帽子をつける習わしだったので、それを覆わずにいただけでも異様だった。彼らは、天災や飢饉、政治的変動などにより、本来の生業・住所をはなれざるをえなかった者と思われる。左下に白覆面に赤衣の「犬神人<sup>いぬじにん</sup>」がいる。彼らは京都清水坂に住む非人で、主に汚穢者の処理や警護を担当した。覆面は変装して自分を解き放って別の自由

「バサラ」とは異様な風体や乱暴な振る舞いを入りの衣や派手な色の帷子などは許されなかった。ばれた新興の武士勢力の間に広まり、きらびや暴狼藉を働く者たちが登場した。彼らが「バサラ」あるいは「悪党」と呼ばれた。「バサラ」は、単に自らの快感のために乱暴狼藉を働いていたのではなかった。その行為には権威への挑戦、秩序の破壊の側面があった。だから時の権力者たちはバサラの反権力としての運動が広がることを恐れた。

1333年の「建武の新政」では、後醍醐天皇が「悪党」と呼ばれた新興の武士たちの武力を頼りにして行われたため、新興の武士勢力を政治の表舞台に登場させることになった。成り上がりの武将から佐々木道誉らの守護大名、高師直のような幕府中枢人物までも、古い権力に代わる新しい権力のスローガンのようにして「バサラ」の風を吹かした。

反権力の事例のような事件が太平記に土岐頼遠の話として登場する。

仏事の帰りに北朝の光厳上皇一行が、市中で土岐頼遠、二階堂行春の騎馬武者隊と出会う。騎馬隊は騎射訓練を終わった後で、大酒を飲み泥酔状態だった。相手が上皇だと気付いた行春はすぐ下馬したが、頼遠は自分に下馬を命じるバカは誰かと言い出した。上皇の御幸だと咎められて、「なに院というか、犬というか、犬ならば射て落さん」と叫んで、韻を車の中に押し込めて犬追物のように騎射して弄んだ。上皇一行は牛車を壊され公卿たちもやっとの思いで逃げ出し、上皇は世の末を嘆いて泣く泣く御所へ帰った。幕府を仕切っていた足利直義が激怒し、行春が流罪、頼遠は斬首された。(23巻)

この院を犬と罵倒し弄ぶ姿勢には既成の天皇や公卿たちに対する尊敬の気持ちは感じられない。むしろ院の方が世の中の秩序がひっくり返ってしまったと言って呆然とするばかりだった。後醍醐天皇が始めた建武の新政もわずか2年足らずで破たんする。新田義貞の弟・脇屋善助が四国平定後に急死すると、南朝は一気に弱体化し、北朝が優勢になって既存の

秩序も破壊されることになった。

#### (4)「理尽抄」と「太平記読み」

さて、われわれが今日接することができる「太平記」は、文書として記録に残された書物である。中にはこれがフィクションの歴史小説であることを忘れて歴史書と勘違いする人もいるほどだが、それには理由がある。もともと太平記は、作者、作成時期とも未詳だが、北朝に好意的に書かれていることから足利幕府側の知識人が作成、校正にかかわったのだろうと推測されて、太平記が足利氏によって管理され、足利家の正統性を示すものとみなされてきたためである。

しかしここではそれが問題ではない。庶民にとっては、「太平記」ははじめ書物としてではなく、講釈師たちによる「太平記読み」によって語り継がれてきたことに注目したい。それはちょうど、平家物語が琵琶法師の語りで伝承されてきたと同様に、太平記は講釈師の語りにより伝承されてきたものである。この「太平記読み」とは門々に立ってその一節を読みあげて銭をもらっていた放浪芸人のことを指す。放浪芸人たちは、色あせた黒紋付に深編み笠をかぶり、扇子を器用に操りながら、誰もが好みそうな楠木正成ストーリーの聞かせどころを情感込めて哀音切々と読みあげた。諸国を旅しながら、津々浦々の民衆を相手に楠木正成ストーリーを刷り込んだ。かくして、いくつかの名場面は庶民の耳から魂へと染み込み、刻まれていっただろう。そのクライマックスは、いうまでもなく楠木正成の「桜井の駅」から「湊川の戦」にいたる一節。聞者は愛情を込めてその死を悼んだ。口々に「残念じゃ」とこぼしたという。このために楠木正成のことを「残念さん」と呼ぶ人までいたという。

江戸期の元禄時代に出版が広く普及して、書物が流通しだすと、太平記は講釈師による語りと平行するように書物からも人々の間に広がり始めて、より広く太平記が普及したと思われる。平家物語では仏教にもとづく因果応報、太平記では儒教の君臣名分論が強調されている。しかし、これが講釈師の「語り」で伝承されてきたとなると、いつも小説の底流を流れる仏教や儒教まで話が及ぶとは限らない。もっと人をひきつけてやまない話が強調されるようになったのは想像に難くない。平家物語で言えば、木曾義仲の最後、那須与一の活躍、一の谷の戦いなどの名場面が強調されたはずである。太平記では、楠正成の活躍と悲劇、高師直の強権とその標的になった塩冶判官の話が強調されただろう。

ところで、講釈のルーツは仏教由来の説教や神道講釈であるが、大衆化という面で「太平記読み」が果たした役割は大きい。しかし、「太平記読み」には二種類あって、民衆相手の太平記読みと同時にもう一つは武士相手に「太平記評判秘伝理尽抄」（以下「理尽抄」という。）講釈をさすことがある。

当然のことながら、民衆相手の「太平記講釈」が流行する以前から、大名や武士を相手にする「太平記読み」がいた。その講釈のタネ本が「理尽抄」だった。理尽抄講釈は、江戸初期に上級武士層の秘伝として武士が行う政治の基本になっていた。理尽抄講釈は、『太平記』の人物や事件を論評し、膨大な別伝をつけている。特に『太平記』から楠木正成を理想の政治家として描いて、政治を行う者の心得とその方法を記した書だった。この「理尽抄」は、楠木正成を『太平記』で描かれているような名将、あるいは敬虔な神仏の信仰者の姿をはるかに飛び越して、文武両道の模範的な政治家に作り変えている。ここでは楠正成は軍略家であると同時に優れた農政家で、用水整備や新田開発を進め、植林を奨励する一方で悲劇に巻き込まれていくヒーローに祭り上げられている。

この「理尽抄」が元禄時代に出版物として発行されると、人々は講釈師に頼らずとも、書物から理尽抄講釈に接することができるようになった。こうして『太平記』にはないことまで盛り込まれた「太平記読み」の楠木正成ストーリーはその影響力を一層高めて、林羅山や山鹿素行、熊沢蕃山にまで影響を与えていくことになる。それだけでなく、「語り伝承」で繰り返されていた従来からの「太平記読み」も出版物の登場でしだいに理尽抄講釈と同化し始めたに違いない。元禄時代の出版の普及により太平記読みは広く庶民階層に普及し、語り継がれるようになったのだろう。

若尾政希氏は、近世前期に武士相手に太平記講釈をした人を「太平記読み」と呼んで、庶民に芸能として広がった講談としての太平記読みと区別している。その「太平記読み」から主君や武士が学んだことは次のような点である<sup>16</sup>。

- 主従関係は従者が主君の恩の反対給付に依存する双務関係。領主は民を慈しみ恩を感じさせることで、民を服従させる。
- 主君が過酷に民を収奪すると、民は疲弊し税収も減って民の反抗を招く。万民を養育するのが主君の責務。
- 国は主君の忠の対象だが、民もその恩恵を受けているので、主君だけでなく民もまた国へ忠誠を尽くす必要がある。
- 主君と国を分離し、忠は国に対して尽くす義務で、主君には恩に報いて尽くす義務があるとする。

若尾氏は、戦国武将から藩主へ変身を余儀なくされた大名たちに幕藩体制のためのマニュアルとなって強い影響を与えたのが、「理尽抄」をネタ本にした「太平記読み」だった、と考えた。そして彼は、これまでの主流だった江戸の政治思想の基軸が朱子学だったという

---

<sup>16</sup>若尾政希『『太平記読み』の時代』（平凡社、1888年）



見方に対して、「太平記読み」の思想が江戸時代の秩序の根幹にあると考えた。このことは支配者の大名と被支配者の民衆が、実は「太平記読み」＝「理尽抄」で政治的、思想的教養を共有しあっていることを発見した。



法服を着て密教法具を手にした後醍醐天皇増。

1333年、船上山にいた後醍醐天皇は自軍が京都を攻めあぐねていることにいら立って、自ら金輪の法を行つたと「太平記」に書かれている。藤沢の遊行寺（清浄光寺）にこの絵が伝わっている。

## 第5章 「忠臣蔵」とは何か

### (1) 趣向を競う時代物 ～忠臣蔵の事の始まりは「邪恋」

浄瑠璃は世話物と時代物に大別される。時代物は江戸時代以前の事件や江戸時代の事件であっても江戸以前の事件として取り上げる作品を指す。だから時代物は、歴史的人物や事件の名前を借りながら、史実にあまり束縛されることなく、作者が自由に構想した作品が多い。そうはいっても史実の力には抗いがたく、一部の学者には、復讐劇であれ、謀反劇であれ、公的な筋書きが優先されて、私的な義理、人情や人間性の表現は二の次になっているという人もあるほどである<sup>17</sup>。しかし時代物の面白さは、人が知り尽くした話に作者や演者がどういう趣向を盛り込むかが腕の見せ所になっていることは間違いない。

その時代浄瑠璃では、世話物が一段構成であるのに対して、原則として全体を「一段目恋、二段目修羅、三段目愁嘆場、四段目道行、五段目問答」の五段の構成で作るのが決めごとだった。一段目が事件の発端、二段目が事件の展開、三段目が俗にいうヤマ場で悲劇の頂点、四段目がよく「かけおち」のような事件の新たな展開、五段目で大団円又は破局などで事件の解決に至るという工夫である。その時代浄瑠璃の五段の構成によれば、「仮名手本忠臣蔵」は次のようになる。

| 段数 | シーン    | 具体例                                           | 備考                |
|----|--------|-----------------------------------------------|-------------------|
| 初段 | 恋慕     | 高師直の顔世への横恋慕<br>お軽勘平の恋<br>小浪と力弥の恋              | 大序<br>二段目<br>三段目  |
| 二段 | 修羅場    | 塩谷判官の刃傷<br>高師直の家来鷲坂伴内と勘平の闘争                   | 四段目               |
| 三段 | 愁嘆場    | 勘平の死<br>本蔵の死                                  | 五段目<br>六段目        |
| 四段 | 道行     | 天川屋義平の家族の道行<br>お軽勘平の山崎への道行<br>戸無瀬・小浪親子の山科への道行 | 七段目<br>八段目<br>九段目 |
| 五段 | 問答（解決） | 討入                                            | 十段目<br>十一段目       |

この五段の構成からみれば、「仮名手本忠臣蔵」は、二つの大きなストーリーで作られている。一つが仇討の話で、二つ目がお軽勘平の悲恋や加古川本蔵一家の悲劇が繰り広げる愛憎話である。

初めに仇討の話を見ていく。高師直の邪恋から始まった悪事により劇中で秩序が不正に汚

<sup>17</sup> 藤野義雄「近松と最盛期の浄瑠璃」（おうふう、1980年）

染される、三段目の愁嘆場では勘平の犠牲的な死が苦境を解決する働きをして秩序を立て直す、勘平の死が犠牲となって善の力が回復し、死んで行く者も人々の思い出の中に永遠の命を獲得する、というストーリーで読むことが出来る。こうなると最早、忠臣蔵は仇討に名を借りた愛憎劇のように見える。

二つ目の愛憎話は、勘平が色にふけたばかりに武士階級からの落伍者になるが、お軽を売りとばし、自身も自害することで最後にまた武士へ復帰できた。加古川本蔵も自分の行動で娘を不幸にさせたが、その娘の幸せを成就させるために自分の命を投げ出した、とストーリー展開している。

これらを見ていると、忠臣蔵が定説の仇討ち話というのは表向きの話に過ぎず、実は愛憎劇で読む方がふさわしいように思われる。定説に基づいた理解にこだわると、これまで殿中で塩谷が刃傷事件を起こした原因については、従来から乱心、喧嘩、遺恨の3つが考えられてきたが、一長一短があってどれも決め手を欠いていた。その問題点は次の通りである。

- ① 乱心説→ 心神喪失で通常の実責任能力を欠くとみなして本人のみが責任を負い、家族親類に責任追及は及ばない。しかし、事件後の弁明で浅野は自身で正気だったと証言しているので該当しない。
- ② ケンカ説→ 喧嘩両成敗が適用。しかし事前に二人の間で口論や争いはなかった。
- ③ 遺恨説→ 浅野自身が事件後の弁明で遺恨があったと述べている。その理由として、吉良の態度が尊大で浅野を侮った、浅野が製塩技術を教えなかったので恨みに思っ<sup>て</sup>無礼な態度をしたなどが想定されているがいずれも確証がない。

どの説も決め手を欠くが、塩谷判官が日頃からずいぶんイライラしていたことは共通している。何に対して塩谷は苛立っていたのか。それを考えるために、「仮名手本忠臣蔵」が「時代定め」にした「太平記」の中で、塩谷が高師直にひどく恨まれて最後に追い詰められて一族皆が自害する悲劇について注目したい。

「太平記」では高師直が塩谷判官の妻・顔世に邪恋をする。吉田兼好に代筆させた恋文を届けるが、それに対して顔世は「重きがうえの小夜衣」とだけ残してそっけなく断ってしまう。未練いっぱいの権力者師直は諦めきれず、塩谷が南朝方へ移って幕府転覆の陰謀を計画していると足利尊氏将軍へ<sup>ざんげん</sup>讒言する。危険を察した塩谷は師直を討って無実を晴らそうと決意し、自国の出雲へ妻子ともども帰国する。顔世と子供は道中の山城国で追手に追いつかれて自害する。塩谷自身は何とか出雲へ戻ったが、妻子の死を告げられると馬上で切腹して果てる。

「仮名手本忠臣蔵」でも、高師直は顔世御前に横恋慕してフラれたことを恨みに抱いて、日頃からその夫の塩治判官を疎ましく思っていて、いつも追い落としの機会を待っていたとみることもできるだろう。そうすると、やはり事件の始まりは高師直の邪恋とそれに対する顔世御前の拒絶と言ってもよいだろう。

色にふけたばかりに武士の足場を失った勘平は、一緒に駆け落ちした女房のお軽を祇園へ売り飛ばし、その親の与一部衛も殺され、勘平自身も親殺しの冤罪で自害するなど、その山崎の家をガタガタに壊すことで最後に武士に復帰する。

他方、祇園へ売られたお軽は「恋するお軽」と呼べるほど波乱万丈な人生を送る。祇園で由良之助と出会い、討入計画の手紙を盗み見して一時は殺されそうになるが、由良之助がお軽は勘平の女房だったと知り、床下に潜む斧九太夫を仕留める手柄を立てさせる。彼女はどこまでも亭主の勘平に尽くす女性である。

また、加古川本蔵も自分の行動が娘の夢を壊したことに真剣に悩み、娘の幸せを成就させるために命を投げ出す。

「仮名手本忠臣蔵」のすべての事件が「恋」から起きたという人もいる（谷崎純一郎「顔世」）。そこまではっきり断言できないが、「仮名手本忠臣蔵」のいくつかの場面では、確かに女が重要なカギを握っている。たとえば高師直の邪恋が刃傷事件を起こし、小浪の恋が親の加古川本蔵の命を奪い、お軽の恋が早野勘平の死を早めた、などがその例である。そうすると、忠臣蔵のすべての事件の初めには女がいると言えるようだ。

## **(2) 揺れ動く「武士道」が討入動機か**

当時の幕府資料によれば、「浪士たちが主君の仇を報じると称して徒党を組み吉良邸へ押し入った」とする事実認定にもとづいて赤穂義士の処分がおこなわれている。「称して」というのだから、幕府では討入を主君の敵討と見ていなかった。吉良が浅野を殺害していれば吉良は主君の敵だが、切りつけた浅野に対して吉良は反撃もしていない。吉良が浅野に対して何らの権利侵害もしていないので吉良は敵にはならない。だから幕府では、当初浅野は敵でもない吉良に一方的に切りつけたとみていた。

さらに、討入は幕府では禁止行為の「徒党による暴力行為」に該当するとも考えられていた。ところが、討入後の赤穂浪士たちの「家来口上書」の段階になると、その解釈が変更される。浪士たちの討入は自己の名誉心のためでなく、主君のうっ憤を晴らし不具載天の敵を討つためだったと述べていたため、幕府では最終的には、討入を浪士たちの申し出を斟酌して「忠孝にもとづく遵法行為」だったと解釈した。

広く違法行為だった討入の中で、忠孝心に基づく討入だけが遵法行為に変更された背景に

は、幕府の忠孝心の奨励政策の影響がある。1682 年幕府は高札を出して、衣食住における倅約、家業精勤、博打口論の禁止、人身売買禁止とともに、忠孝に努め夫婦兄弟親類は仲睦まじく、憐憫を加えるよう奨励し、不忠不孝の者は重罪に処するとし、また翌年 1683 年綱吉は武家諸法度を改定し、第 1 条を従来の「文武弓馬の道、もっぱら相嗜むべし」を「文武忠孝を励し礼儀を正すべきこと」に変えた。ここには元禄時代になって、社会全体が武道よりも忠孝礼儀が優先する社会に変化してきた様子をうかがうことができる。

「仮名手本忠臣蔵」は 4 段目の切腹で前半の山場を迎える。塩谷判官切腹の場で、判官が「9 寸 5 分の刀」を腹につきたてた時、待ちに待った大星が駆けつける。その血の付いた刀を形見と言って大星に渡す。その際、判官は「生き変わり死に変わり恨みを晴らさむ」という最後の一念を告げて、大星はその血をなめて腹中に納めて主君の一念を引き継ぐと誓う。血をなめるというのは浄瑠璃ではなく歌舞伎の工夫だが、一念を伝えて死に行くものの魂魄を自分の体内に納める秘儀である。パンをキリストの肉、葡萄酒をその血と考えるカトリックも日曜のミサのたびにかっぱえびせんの形をしたキリストの肉を口にして、信者がキリストと一体化する儀式と似ている。

武士の道徳はもともと「弓矢取る身の習い」を基本とする武士気質（かたぎ）に過ぎず、まだ「武士道」という言葉もなかった。そうした時に、忠臣蔵は御用金の配分や大星の武士のリーダーとしての苦悩を正面に出して、平和にどっぷりつかっていた武士に対して「文武、忠孝、礼儀」が武士が守るべき道徳心だろうと提示したようなものである。しかも、それに対する幕府からの回答は、従来の「武士道」よりも「忠孝礼儀」による秩序を優先するものと解することができるだろう。

武士道より忠孝礼儀が優先された倫理だったかどうかを、加古川本蔵の悲劇を例にして検討する。

「大序」では、桃井若狭之助が高師直に今すぐにも切りかかりとう興奮している。ところが「三段目」になると、刃傷沙汰を起こすのは桃井でなく塩谷判官の方になる。どうしてそうなったか。ここに桃井の家老・加古川本蔵が登場する。

「三段目」の「松の廊下・刃傷の場」の前の「進物場」で、加古川本蔵が師直に多額の賄賂を贈って若狭桃之助のとりなしを頼む。師直は賄賂を受け取って不本意ながら若狭之助に平身低頭するようになる。そこへ塩谷判官が通りかかる。腹の虫がおさまらなかった師直は判官をいびり始める。追い打ちをかけるようにそこへ横恋慕していた顔世御前の交際お断りの手紙が届く。顔世御前の夫は判官である。手紙を読んだ師直は、塩谷判官に一層ひどいいびりを浴びせる。それまで温厚だった判官も堪忍袋の緒が切れて刃傷沙汰に及ぶ。そして、四段目の切腹で、判官が大星由良之助に「恨むらくは館にて、加古川本蔵に抱き

とめられ、師直を討ち漏らし無念。骨髓に通って忘れ難し」と言って絶命する。  
この経緯からすると、

- 若狭之助は、本蔵が師直に賄賂を贈ったことは知らない。だから、判官が自分のとばっちりを食ったことは知らない。
- 顔世御前は、夫の判官が刃傷を起こしたのは自分が原因だったと考え自分を責める。
- 塩治判官は、師直が妻に横恋慕していることは知らない。師直が自分をいびり、「鮒侍」とまで言われた理由については多分わからなかった。
- 大星由良之助は、判官が刃傷に及んだ理由もわからなかった。ただ判官の遺言を守って、本蔵が判官を抱きとめて師直の成敗を阻んだことは許せない

ということになり、事態の全体像を知るのは加古川本蔵だけだったことになる。

その加古川本蔵が忠臣蔵でしめる役割について意見が定まらない。大方の意見は、加古川本蔵という人は賄賂を使いながら巧みに世渡りをしていく老獪な役人だった、しかし、賄賂を贈って工作するのは真の忠義ではなく、本蔵はそのことを恥じて死んでいった、という意見だろう。実際にも、「九段目」で本蔵は、虚無僧姿で、由良助に対して主人の仇を討つ気もなくして遊び耽る馬鹿者と言って罵るなど悪役を気取って登場する。

しかしながら、小浪母子に由良之助の妻・お石は本蔵の首と引き換えなら結婚を許してもよいというと、虚無僧に変装した本蔵が登場して、自分から望んで力弥の槍に討たれる。その時引出物代わりに力弥に高師直の屋敷図面を渡す。苦しい息の下で本蔵は由良之助に本心を語る。「約束通りこの娘、力弥に添わせてくださらば、以来永劫御恩は忘れぬ。これ手を合わせて頼み入る。忠義にならでは捨てぬ命、子ゆえに捨てる親心水量あれ」。

本蔵が、刃傷事件以来ずっと忠義と家族愛の間で格闘していたことに改めて気付かされる。あの刃傷事件の場面を振り返ってみると、本蔵は、師直に賄賂を届けて帰ろうとしたが、師直から足利屋敷をぜひ拝見せよと強く誘われて屋敷に上がり、刃傷沙汰の時にたまたま松の廊下の小柴の陰に隠れていた。本蔵は、自分の工作がうまくいかず、主人・若狭之助が刀を抜いたら自分が止めに行こうと思っていた。しかし、実際には、眼前で塩治判官が刃傷に及んでしまうのは計算外だった。彼はその時、とっさに高師直を殺さなければ塩谷側にも切腹やお家断絶の処分はなかろうと考えて、低い身分であったが庭先から殿中に駆け上がって判官を抱きとめたと考えられる。

では、本蔵はなぜ自分の主人でもない判官の切腹やお家断絶の心配をしたのか。ここに本蔵の悲劇がある。本蔵の娘小浪は大星力弥と許嫁である。だから、「忠義ならでは捨てぬ命、

子ゆえに捨てる親心」の思いで、間もなく婿になって本蔵の子になる力弥とその父由良之助のために判官を抱きとめたと考えられるのである。優秀な家老として主君の若狭之助に対する忠義を旨としてきた本蔵が身分違いの殿様たちの喧嘩に巻き込まれて、判官の邪魔をした悪い男で憎まれ役になったのである。由良之助とその妻お石からすれば、本蔵が死ななければ主君の恨みが晴らせないので、今のままでは力弥と小浪の結婚も認められない。だから、本蔵は力弥の槍の前に立って刺されて死んでいくのである。

本蔵も大星もともに短慮な主君に仕えて様々な苦労を重ねて、忠義とは何か、忠義はどうあるべきかを考えてきた人だった。それなのに今進むべき道が大きく分かれる。かたや本蔵は、主人若狭之助からお暇を頂いて忠義でなく子供のために死んでいく。それに対して由良之助は、引き続き忠義のために討入に向けて行動してゆかねばならない。それに加えて、若狭之助は頼りにしていた家老の本蔵のとっさの機転が江戸城の中では若狭之助=へつらい武士の悪評をもたらす結果になった。若狭之助は、本蔵が家名に傷をつけたので死罪も検討するが、結局、本蔵が自ら由良之助に討たれに行く決意を固めたのを見抜いて暇を出すことにし、虚無僧の装束一式と高師直邸の屋敷図面を渡す。

### (3) 高師直は南北朝時代のバサラ

高師直は、意地の悪い強欲な老人というのが昔からの通り相場だった。「仮名手本忠臣蔵」でも将軍足利尊氏のナンバーツー（執事）で、将軍の弟足利直義<sup>ただよし</sup>に対してさえ平然と異議を唱え、気に入らない大名をいびり、その家老から賄賂をとって平然としている老獺な老人である（大序、2 段）。その上に女好きで美女の評判が高かった塩治判官の妻顔世御前に横恋慕し恋文を届けて断られると、八つ当たりして手紙を運んだ中間が逃げ出すほどしつこい性格だった。

高師直は、忠臣蔵全 11 段中初めの三段にしか登場しないのだが、最後まで見る人にその強烈な個性を与え続けている。高師直の姿は「折立烏帽子に大紋」である。その造形は権力そのものがもつ「悪」の象徴のように見える。





『仮名手本忠臣蔵』3代目中村鴈治郎の師直（2002年11月国立劇場）

江戸時代の武士は地位によって礼装の種類が細かく決められていた。通常五位の一般大名の礼装は「大紋」だった。左右の胸に家紋が大きく染め抜かれているのが特徴で、袴は長袴をはき、烏帽子をかぶった。歌舞伎でも大紋は武家の礼装として用いられるが、高師直の場合は、実際よりも紋を大きく染め抜き、袴も長くするなど「悪の権化」として誇張が見られる。

この高師直像は、「太平記評判秘伝理尽抄」<sup>18</sup>に強く影響されている。理尽抄では高師直を次のように説明している。

師直は文盲で、勉強もしなかった。そのため是非非事（ものごとの正邪）が判らず、やたら勇ましく何でも力づくで、東国訛りの言葉で目を吊り上げて人に命令し人を怖がらせた東国の武士だった。この無道無知の者が天下の執事（幕府の長官）になり奢り高ぶりを極めた。依怙贖賈がひどく、諸国の人々はこぞって賄賂を贈って、彼に親しくなりたいと考えた。初めのうちは何も考えなかったが、後になると賄賂を贈って何かを依頼する人には道理に合わないことも良しとしたため、国法も乱れて道理も自然に失われていった。こうして執事に賄賂を贈る者が数知れないほど多くなり、後になると宝が倉庫に一杯になるほどだった。権力がもつ魅力に取りつかれた高師直は、奢りを極め、物欲を満し、色欲を充足させて飽きることを知らぬほどになった。

<sup>18</sup> 「太平記評判秘伝理尽抄」は、「太平記」に記された事件、合戦、人物などに政道や兵法の立場から加えた評論部分と、「太平記」本分には籙寿しない外伝や秘話を取り入れた伝記部分からなり、もう一つの「太平記」と呼ばれるほどの世界を作り上げている。この本は後世にたくさん話題を提供しているが、とりわけ「太平記よみ」の講釈の種本となり、初めは武士の間で、後には庶民の間へ普及し、近世の話芸、舌耕文化（講談、演説などで生計を立てた人々が生んだ文化運動）に大きく影響した。



「これのみにあらず、京中の妻女少なくとも顔や体が美しいことを聞いて、身分の上下を問わず、賤しき町人などの女房と清水詣でなどと称して密会した。雲の上に住む高貴な奥方には何度となく御所へ忍び入り、師直に思いをかけられた女でノーという者は一人もいなかった。地位の高い公卿からは領地を没収し、従わなければ罪状を言い渡す。また自分が気に入った女性がいると、その人と言っているうちに半年もせぬ間に身に余る金持ちになっていく。世の人々は欲のために義を忘れるだけでなく、無実なのに罰せられることを恐れて従う者も生まれてきた・・・。」

権力を背景にした奢り高ぶり、異常な物欲と色欲にまみれた師直像は、太平記本文の中で明らかだが、その姿は、先ほどの各種演じ物の中でも再現され続けて、忠臣蔵の高師直とぴったり重なる。いわば理尽抄が規定した師直像が、事後の師直像を律しており、仮名手本に至るまでその例に漏れない。

「太平記」中で、後醍醐天皇を頂点とする登場人物たちが実にユニークである。日本の長い歴史の中で、こんなにも短い期間にかくもエネルギーに満ちた人物がひしめき合った時代は幕末期の騒乱と並ぶ稀有な例である。

この時代を彩った特異な人物像の特徴は「婆娑羅」である。バサラとは異様な風体や乱暴な振る舞いを指す。鎌倉時代までは、摺衣すりごろもや柿帷子かきかたびらなどの服装は禁忌で、非人の間でのみ認められていたに過ぎなかった。それが太平記の時代になると、「悪党」と呼ばれた新興の武士勢力の間に広まり、異様な服装をきらびやかに飾り立てて、乱暴を事とするものを輩出した。時の人々はそれら「悪党」をバサラと呼んだ。

とくに、建武の新政をきっかけに、それら新興の武士勢力（「悪党」）が表舞台に躍り出ると、バサラの風潮は社会のあらゆる層に広がった。名和長年のような成り上がりの武将はいうに及ばず、佐々木道誉や土岐頼遠のような守護大名、果ては高師直のような足利政権の中枢人物までもが、「バサラの風」を吹かしたのである。後醍醐天皇が頼りとした武力を悪党たちが担ったという事情が、追い風となって働いたのはいうまでもない。

「バサラ」とは、奇異な服装を見せびらかすということのほかに、乱暴な行為をもさしていた。だがそれは、単に乱暴狼藉というにとどまらなかった。権威への挑戦、秩序の破壊といった側面があり、それが時には為政者たちを憂慮させもしたのである。

高師直の場合は足利家の執事であり、幕府方の最高権力者の一人であったことを勘案すると、そのバサラぶりは常軌を逸したものであった。京へ進出した師直は、護良親王の御母堂の屋敷を接収してそこに華美な館をたて、高貴の姫たちを呼び込んで次々と子を生ま

せたことから、落首に「執事の宮廻りに手向を受けぬ神もなし」と揶揄された。さる姫君を口説こうと、徒然草の作者兼好法師に恋文の代筆をさせたとは、うそか本当かわからぬが、恋達者師直の真骨頂ともいえる逸話である。塩冶判官の妻に横恋慕しついに強姦するところなどは、悪の権化に相応しい所業として、人々の目には映った。これがもとの、高師直の悪役のイメージは決定的となり、やがては時代を隔てて、仮名手本忠臣蔵の敵役にもされたのだろう。師直のバサラぶりの背景には、彼が組織した軍事組織の力があつた。彼の子飼の兵力は、畿内周辺から集めた悪党からなっていたのであり、これら悪党たちの力を借りて、楠木正行や畠山親房を倒すこともできたのである。悪党たちはみなバサラの徒であつた。師直はその代表選手だったのである。

#### **(4) 忠臣蔵を楽しくさせる多彩な義士たち**

「仮名手本忠臣蔵」の構成は、大序～4段目＝春、5、6段目＝夏、7段目＝秋、8段目以降＝冬である。史実では刃傷事件は元禄14年3月～討入が元禄15年12月で1年9か月かかる事件だったが、作者はそれを四季の巡りにデフォルメした。このデフォルメにより、赤穂事件がそうだったように、忠臣蔵も四季の移ろいとともに発端→苦難→討入→切腹に発展して終結するドラマ仕立てになっている。ここに作者は誠に多彩な忠臣義士を登場させて、忠臣蔵を一層楽しいものにさせている。

#### **ア 天河屋義平の義商伝説が忠臣蔵を広めた**

討ち入り道具一式を調達する天川屋義平は、秘密保持のために奉公人を解雇。それだけでなく実家が斧九太夫に縁があるとして女房も実家に戻して、本人と子供と丁稚の三人暮らしをしている。仇討成就のために店を犠牲、夫婦の別離、母子の別れなどの大衆劇の常とう手段が全部そろっている。

そんなある日店に大勢の捕り手が乗り込んできて武器調達の嫌疑がかけられる。一人息子由松にも刀を突きつける。また、実家に戻した女房を再婚させて利益を得ようとする舅了竹が縁切状を書けと迫る。仇討成就のために人生をかけた義商が、ここで「天河屋義平は男でござるぞ」の啖呵を切る。こうした「決めセリフ」が「義商伝説」となって、観客の口から口に伝えられて忠臣蔵を広めた。

#### **イ 47人目の義士**

お軽の兄・寺岡平右衛門（史実上は寺坂吉右衛門）は47人目の義士である。

史実では、寺坂は足軽だったが、足軽頭の吉田忠左衛門に申し入れて内蔵助の了承を得て岸になった。討入当日も集合場所だった堀部安兵衛宅へ赴き、討ち入りに参加して本懐を遂げて泉岳寺へ引き上げる途中に姿を消した。「仮名手本」では、討入計画を覗き見して内蔵助から口封じされると知った兄寺岡が、妹よお前の命が俺がもらったと言ってお軽を切

りかかる。飛びのいたお軽に、父与市兵衛が殺されたこと、勘平が切腹したこと、由良之助の身請け話はお軽の口封じのためであること、自分が妹を殺してそれを多賀らにして仇討ちの仲間に加えてもらうこと、を告げる。それを聞いてお軽も兄に殺してくれと頼む。これを見ていた内蔵助は仇討ちの連判に加わることを許して、47 人目の義士となった。史実上の寺坂は義士の中でただ一人生き残り、3 歳の長寿を全うしたと言われる。

また、勘平が 46 人目、平右衛門が 47 人目で、48 人目の男もいる。大仏次郎の小説では、討入当日に脱盟した小山田庄左エ門は自我に目覚めて生きようとする義士と不義士の境目を象徴する人物でとされている。しかし、10 段目では、武士も及ばぬ天河屋義平が 48 番目の忠臣の蔵に入る資格を得ている。

## ウ 義士銘々伝

忠臣蔵には「本伝」＝主となる伝記と「小伝」＝義士銘々伝がある。それ以外に「外伝」＝銘々伝の人物を主人公にしたものもある。その小伝（義士銘々伝）の例。

- |       |                                                                                                                                                        |
|-------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 赤垣源蔵  | 飲み友達だった清水一角と一騎打ちをする                                                                                                                                    |
| 武林唯七  | 浅野内匠頭の月代を剃っていて緩んだ剃刀の柄をトントンと殿の頭を台代わりにて直した                                                                                                               |
| 神崎与五郎 | 天竜川の川越で乱暴な馬方からまれて詫び証文を書いた                                                                                                                              |
| 杉野十平次 | 吉良邸の様子を探るために夜鷹蕎麦屋に身をやつすうちに俵屋玄蕃という槍の名人と友人になる。玄蕃は討入当日助太刀を断られて、両国橋に仁王立ちして討入の邪魔者を止めた。                                                                      |
| 大高源吾  | 芭蕉門下の宝井其角と知り合い、12 月 14 日夜に吉良邸で句会があることを聞きだした                                                                                                            |
| 堀部安兵衛 | 浪人時代に高田馬場で 18 人を相手に叔父の仇討ち支援をした（中山安兵衛）。見物の娘から赤い扱き帯 <small>しごきおび</small> をプレゼントされる。それをタスキにして仇討ちの応援をした。後日その娘の父に気に入られて、婿入りして堀部姓に変わった。だから彼は生涯で 2 度仇討ちに参加した。 |

義士銘々伝が面白いのは、こうしたエピソードだけでなく厳密に見ると討入の趣旨目的が人ごとに微妙に違う点にもある。

彼らが討入の際に残した「家来口上書」では、浪士には「家、一族の名誉を守り忠義を尽くす」という武士の強いプライドがあった。討入は自分の家族を悲しませる不幸という自覚はあったが、死を恐れない武士の姿を世間に示す行為が武士道にかなう「忠死」（忠義のために死ぬこと）で、武士としての名誉を得ることでそれが家、一族の名誉につながると考えていた。忠が考に優先させたが、忠の達成が家への貢献になり、家を媒介にして考

が忠に飲み込まれると考えた。この考え方の元が武士道である。

しかし、厳密に見ると、忠義を示す対象に「お家か主君か」の違いがあった。当初、大石＝お家再興、安兵衛＝討ち入りの意見対立である。優先順位としてお家か主君かの選択である。これには時代的違いというよりも、出身の違い、主君との政治的、空間的、個人的関係の違いから生じている。内蔵助は曾祖父以来浅野家家老職で、大叔母が初代藩主の娘だったので、浅野家の御家筋のものだった。他方、安兵衛は亡父が新発田藩士だったが、高田馬場の一件を赤穂藩士・堀部弥兵衛に見込まれて養子となり、内匠頭に許されて江戸屋敷の馬周りに取り立てられた。安兵衛には内匠頭はその恩で家臣に取り立てられた特別な主君で、その子の大学は彼の主君ではなかった。



三段目 腰元お軽文使いの段（産経新聞社）

## 第6章 忠臣蔵と「武士道」

文楽や歌舞伎で、46名の赤穂浪士たちが吉良邸を襲撃して、吉良の生首を槍にぶら下げて市中を凱旋行進する姿を見て、人々は戦国時代が再来して武士の中にまだ「つわもの」の面影を残した人たちがいたことに驚かされたに違いない。当時の人々が普段見るのは平和にどっぷりつかってお城へ勤務するサラリーマン武士だった。赤穂浪士の凱旋は、もともと武士というのは「もののふ」だったはずで、どうしてこうも変わってしまったのかと問いかけたに違いない。いわば、忠臣蔵は武士に平和の中での武士の生き方がどうあるべきかと問いかけたと見ることができる。そこで、武士道について考察する。

### (1)「武士道」の変遷

今日では「武士道」は、日本人を代表する一種の倫理思想になっている。以前から「武士道」は、特に武士階級にとってみれば単に「武士の剣技」に止まらず、「武士の道徳」「武士の生活態度」の意味でも使われた。しかし、体系性のある「武士道」は、江戸時代と明治時代ではその内容が著しく異なっている。さらにいえば、江戸時代以前には武士道という言葉すら存在しなかった。そこで、論旨を明快にするために、本稿では戦国時代の武士道を「戦国武士道」、江戸時代の武士道を「近世武士道」、明治時代の武士道を「明治武士道」と呼ぶことにする。

#### (戦国武士道)

江戸時代以前には、武士は「兵の道」「武者の習い」「弓矢取る身の習い」というように兵士として守るべき倫理が武士の倫理だったが、時代が進むと、武士が単なる戦闘員であるだけでなく領国、領地を治める為政者の性格を帯びようになった。もともと主君と武士の関係は「御恩と奉公」に基づいたものだったので、武士が生き残るための技術を優先して、主君を頻繁に変えることや卑怯な方法で勝つことも特に恥ずべき行為とされることはなかった。武士にとっては、乱世で生き抜くためのサバイバル技術こそが重要で、そこには崇高な道徳や倫理は介在する余地もなかった。

#### (近世武士道)

江戸時代になって武士が「兵士」から「為政者」へ変貌すると、主従関係も戦国時代のように「御恩と奉公」だけでつなぎとめることができなくなり、別の倫理観が必要にされるようになった。そこへ登場したのが「武士道」で、元もとの武道に加えて、「仁義」「忠義」「礼節」「誠」などの精神性の高さが武士に求められるようになった。

「武士道」という言葉を最も早く使っている文献が「甲陽軍鑑」<sup>19</sup>である（1656年）。ここでは狭義の軍法や戦法に加えて武士や大将の心構えも語られており、精神と一体になった戦闘や武芸の修練を「武士道」と呼ぶようになった。戦闘や武術はその底にある「精神」と強く結びついているので技術 skill と分けられない。体で覚える skill と頭で覚える knowledge が不可分な関係とされている。

同じように宮本武蔵が晩年に書いた「五輪書」（1643年）も、武術上のスキルと兵法や武士の生き方を述べた書である。自身の経験を踏まえて抽象化しているが、剣の持ち方、大勢の敵と対決する時の戦法について、武士の兵法は人に優ることが基本で、「一身の切り合いに勝ち、あるいは数人の戦いに勝ち、主君のためわが身のため、名を上げ身を立てんと思う、これ兵法の徳をもってなり」（「五輪の書」地の巻）と述べている。「五輪書」はもともと剣術指南書だが、ここでも武士道という言葉は武士の具体的な剣技から一般的な生活態度まで広げられて用いられている。

こうした武術＋精神をめざす新しい武士道は、山鹿素行「山鹿語類一士道篇」（1665年）によって体系化された。素行は、武士が為政者でいるのはその高い精神性による。武士は人倫の指導者的立場にあり、常に礼儀を律し他の身分の人々の模範でなければならない。武士が道徳的優越性をなくせば単なる遊民になる。武士道思想の中心は奉公にあり、武士が従うべきものは士道という道徳規範で、士道は為政者としての武士の基本であり、諫言を聞き入れない主君の下には止まるべきでないと主張した。この素行の新しい武士道論は「士道」と呼ばれ、今私が「近世武士道」と呼ぶものになった。

素行の士道論と対照的に、従来の戦国武士道を強調したのが肥前鍋島藩の山本常朝「葉隠」（1716年）である。「葉隠」は、天下泰平に慣れきった鍋島藩の武士たちが集まると、お金、損得、内緒話、衣装、セックスの話ばかりするようになってすっかり気風も変わってしまった、といって世相を嘆く。その軽薄な風潮を改める4つのポイントを指摘した。第一は「武士道とは死ぬことと見つけたり」という極限状況の日常的設定。死という極限状況を日常的に設定して、最悪事態を日常的に覚悟し不断に積極的に前進を試みればかえって余裕ある自由な決断ができる。日常の形式化、ルーティーン化を防止するため毎日の

---

<sup>19</sup>「甲陽軍鑑」の甲は甲州、陽は太陽で、軍法の手本（鑑）とすべきという意味がこめられた書物。江戸時代初期の軍学書。全五十九品からなり、信玄・勝頼二代の軍記と実録を編集したもの。武田信玄に仕えた高坂弾正昌信の残した記録を元にして、春日惣次郎、小幡下野らが書き継ぎ、小幡景憲が集大成した体裁をとっている。現存する最古の版元は明暦2年（1656）のもので異本も多い。多くの実録書や軍記物に引用されている。

一刻一刻を非常事態における決断の連続ととらえる必要があると説く。第二は単一目標によるエネルギー集中。目的と手段の比較衡量、合理的思考を排除する思考法。一点突破全面展開と言ってもよい。第三は目標の単純化とそれに向けての決断主義。知性や規範は人を理屈好きにする。第四に無条件の忠誠行動。

以上の4点が主張の骨子だが、「葉隠」は、武士の役割として武装した戦闘者の側面を強調し、反教養反知性を優先するあまり、武士が民衆を教化する側面を欠落させている。このために「葉隠」は戦国武士道を純粹培養したものになった。「葉隠」はこのように主従関係が固定された時代の中で戦国武士の忠誠の実践を説くもので、アナクロニズムな武士道だった。前の戦争中に「学徒出陣」などのファシズムの暴走を正統化するためにこの「葉隠」が乱用されたために、「葉隠」が「武士道」の嫡流のように誤解されて受け取られる事態が時々みられるが、「戦国武士道」とは別物と考えるべきものである。

丸山真男氏は<sup>げんなんぶ</sup>元和偃武の時代に戦国時代の武士の風俗を「武士道」と呼んだのが最初だと指摘している<sup>20</sup>。丸山氏は、もともと日本の武士に特別な道徳などはなかったが、江戸時代に長い平和の時代がやって来て、改めて武士の存在理由が必要になり、「士道」と呼ばれた武士の道徳が必要になった。そのために、戦国時代の「大将を滅ぼし国を盗むのは武士の常」とか「豪傑」とか言われた時代の武士の道徳を「武士道」と名付けて、平和な時代の武士の道徳である「士道」と区別した。だから、丸山氏は武士道という言葉はミネルバのフクロウ<sup>21</sup>と同じように、豪傑が闊歩した武士の時代が終わった時にそのエートスを跡付けて体系化したものと考えた。だからもともと存在しなかった「戦国武士道」があたかも実在して大勢の武士が守った倫理だったという誤解が発生したのは「葉隠」の効果だったといえるかもしれない。

#### （幕末の志士）

幕末に動乱期のダイナミックな戦国状況が再現されると、戦闘者としての武士のエートスがまた復活した。幕末期の日本を襲った「西欧の外圧」は、まず軍事的な脅威として認識されて、軍事的に敗北を喫すると独立できず中国のように植民地化されてしまうと支配層が敏感に反応したのは、彼らが武士=戦闘者集団だったからである。支配層にとっては、幕末期の幕藩体制の危機は、国際的には鎖国の氷解であり、国内的には凍結された戦国時代の群雄割拠の氷解を意味した。泰平な世の中から一挙に戦国時代に投げ出された武士層に

<sup>20</sup> 丸山真男講義録第5冊「武士のエートスとその展開」（東大出版会、1999年）

<sup>21</sup> 「世界がいかにあるべきかの教説について言うならば、それを説く哲学と言うものは元来いつも遅すぎてから生まれてくるものである。現実が自らを形成する過程を完結し、自らを成し遂げた時に至ってはじめて哲学は世界の思想として現れる。・・・哲学がその灰色を灰色に描くときに、生の姿はすでに老いている。そうして灰色を灰色に描くことによって、生の姿は若がえさせられるのではなくて、ただ認識されるのである。ミネルバのフクロウは、迫ってくるたそがれ時になって漸く飛び立つ」。（ヘーゲル「法哲学」序文）

は、強烈な目標志向、不断の業績で示される名誉勘定、転変する状況に対する即応と自主判断などの伝統的な武士のエートスが求められた。主君への絶対的忠誠を誓う武士の間に、藩の運命を個人の力で乗り切ろうとする精神を生んだ。それが「幕末の志士」に共通している、熱狂的な神州観、大和魂の強調、悲憤慷慨の発散、組織を軽視し孤立を恐れぬ高い意気などの行動様式の中に再現されている<sup>22</sup>。

幕府は自己武装の原則の下で独立と名誉を維持してきていたので、外圧に対する日本の独立と名誉が自分自身の独立と名誉の問題として引き受ける下地があったように見える。

「幕末の志士」は一般的には吉田松陰、久坂玄瑞、坂本竜馬、中岡慎太郎、清河八郎、吉村寅太郎など脱藩して中央政界で活躍した人々を指す。しかし、これは志士の行動に注目した見方で、「志」をもって国のあるべき姿を追求した人たちという見方をすればもっと広範に岩倉具視、大久保利通、西郷隆盛、高杉晋作、井上馨、板垣退助らも含まれるという研究者もいる<sup>23</sup>。幕末の「志士」<sup>24</sup>は高い志を持ち、平時には書を読んで勉強し国家経営の大計を議論し、一旦ことが起きれば身を捨てて新国家のために行動した人たちをいう。この「志士」たちの間に「武士道」ブームがあった。「志士」たちに共通するものは、夷荻を忌み嫌う大和魂の持ち主で、西郷隆盛のように死をも恐れない「達観の心情」<sup>25</sup>をもった侍だった。その志士たちも西南の役（1877年）で西郷が敗北すると消え去った。

#### （明治武士道）

明治になって武士階級という身分も廃止されたので、「武士道」も消え去るかと思われた。実際にも、「軍人勅諭」（1882年）でも、軍人は「武士道」ではなく、「忠節」をもって天皇陛下に仕えるとなり、武士や武士道のことは何も触れられていなかった。本来ならば、これまでの権力の番兵だった武士階級が廃止されて新たに一般人で構成される近代的軍隊が権力の番兵にとって代わる事態だったので、ここで武士階級と近代的軍隊の違いなどを明確にすべきだったが、そうした説明は全くなかった。

ところが「教育勅語」（1890年）が公布され、日清戦争（1894年）が終わって家族国家観に基づく忠君愛国と儒教道徳が大衆に求められるようになると急に「武士道」が復活して、今度は国民道徳として持ち上げられるようになった。これは新渡戸稲造による「武士道」

<sup>22</sup> 「幕末の志士」は高い志をもっていつでも命を投げ出す覚悟ができていた行動人を指す。彼らは新国家建設の志を持って戦ったのが特徴。彼らの活躍は短命で、明治になると不要な人々になった。明治以降登場したのが「壮士」である。

<sup>23</sup> 佐々木克「志士と官僚」（講談社学術文庫、2000年）

<sup>24</sup> 明治時代になって「壮士」が登場するが、幕末期に新国家建設の志のために活躍した「志士」とは一応区別されている。その指標には、「志士」のもった新国家建設に向けた志の高さがある。だから明治国家が誕生した時に「志士」の役割が終わり、「志士」が必要とされる時代が終わったと考えられた。

<sup>25</sup> 西郷隆盛は「西郷南洲遺訓」で、「命もいらず、名もいらず。官位も金もいらぬ人は、始末に困るもの也。この始末に困る人ならでは。艱難を共にして国家の大業はなし得られぬなり」といって、「達観の心情」を述べた。



の定義の見直しの影響が大きい。

新渡戸によれば、武士道とは「武士の掟で武士階級の身分に伴う義務」<sup>26</sup>であるが、その精神には義、勇、仁、礼、誠、名誉、忠義が武士の道德観の基礎にあると定義し直した<sup>27</sup>。ここから「武士道」は武士階級の専有物でなく、日本国民全体の共有物と考えるべきと提唱した。特に新渡戸の「武士道」は拝金主義や唯物主義に反対し、個人主義に対するアンチテーゼの「思想」の側面を強く持っていた。こうして「武士道」が復活し、日本の軍国主義を内面から支えるイデオロギーになった。

## (2) 忠臣蔵と「武士道」

武士道の変遷を見ると、ミネルバのフクロウが夕暮になって飛び立つ譬えがよく判る。現実が完全に成熟し、戦国武士の時代が終わった時に武士道が認識される対象になって、武士道という哲学が飛び立ったのである。そして一旦飛び立った武士道という梟は明治 30 年代になると新しい衣装を纏い、日本人に共通する心情として再び人々の前に現われた。「戦国武士道」が役割を終えて「近世武士道」が登場した時、忠臣蔵が大きく影響していたと思われる。

### (武士の社会的存在形態が変化)

「近世武士道」は、武士の社会的存在形態が大きく変化したために登場した。「戦国武士道」の時代の武士は、「切取り強盗は武士の習い」と言われたほど、裏切りや寝返りは武士の常識で、豪傑型武士が力をふるった時代だった。正確に言えば、その時代には体系だった「武士道」は存在せず、一族が生き延びるための処世訓、各家々に生存術があったに過ぎない。それが「戦国武士道」の実態だった。

しかし、江戸時代になり藩の大名（領地を持った分国大名）が一国の土地と人民を支配し、武士が領主から知行地を与えられた家来となり、大名を支える体制が生まれてきて、豪傑型武士が次第に消えてサラリーマン化した武士に変貌した。領主と武士の間もこれまでの乱世におけるサバイバル技術を優先する「主君と郎党」の関係だけでは主従関係が維持されなくなった。よく言われている「御恩もないのに奉公なんかできるか、バカヤロウ」の状態が広がったのである。そこに「仁義」「忠義」「礼」「誠」といた儒教的な道德を援用した倫理観が導入されて、武士に「仁義を尽くす」「忠義を尽くす」ことが求められるよう

<sup>26</sup> 新渡戸稲造「武士道」（岩波文庫、1974 年）

<sup>27</sup> 新渡戸は、武士道がごく限られた社会層だけの倫理観だったにもかかわらず、日本国民の不変的な倫理観とした。当初英語で書かれて西洋の騎士道に類似性があったため、海外で高い評判を呼び、日本の代表的な市民像が武士でその倫理感が武士道という誤解を与えた。今日使われている「武士道」は、個人主義や拝金主義などの世相に対するアンチテーゼの意味で使われていて、明治以降昭和 25 年まで使われていた意味に近く、江戸時代の最初の「士道」や江戸時代後期の「武士道」とも意味が違う。

になった。ここでは、主従関係も従来の双務的主従関係から家産官僚型に変わった。「戦国武士道」に代って「近世武士道」が登場した。「近世武士道」は当初「士道」と呼ばれて、官僚化した武士がもつべき道徳を指した。その内容は、武士が「五倫五常」（人が守るべき5つの道徳—父子の孝、君臣の義、夫婦の愛、幼長の序、朋友の信）によって人民を治め、人民を教化することを役割にするものだった。儒教の考え方では、民衆は道徳「外」的存在で絶えずエゴに振り回されていて自ら秩序を形成できない、それを秩序づけるために民衆に五倫五常を繰り返し教化して五倫の中に民衆を組み入れていかねばならない。その教化が武士の役割というのである。

この「近世武士道」＝「士道」は、平和な時代における武士の存在理由を示すもので、儒教の理想社会にあわせた道徳で、戦国時代の武士の結束基盤だった「武士道」とはおのずと違っている<sup>28</sup>。「戦国武士道」から「近世武士道」＝「士道」への転回によって、武士の役割は戦闘者としての道義心から秩序倫理の方が優先されるようになり、これまでの「主従の契り」という情緒的人格的結合から「君臣の義」という客観的な身分的階層秩序の倫理が優先されることになった。これまでの人格中心から身分中心の秩序が要請されたことが反映されている。

### （「太平記読み」が「武士道」を「士道」へ変える橋渡し）

「武士道」観の変貌は、林羅山や山鹿素行などの江戸の儒学者の間の学問上の議論の中で始まったものでない。その変貌は、江戸時代の庶民たちが支配階級の武士像が戦国時代と大きく変化したことを敏感に読み取って、その社会的役割の見直しを求めた結果起きた事態である。

並木宗佑は1748年に「仮名手本忠臣蔵」を書くに当たって、武士道については「士道論」の立場を選んでいる。その理由は次の二つである。

第一は綱吉の「生類哀憐みの令」の悪政や鋳貨改悪の誤った経済政策で政治経済を停滞させ、その上に天災地変が頻発して、人心動揺が広がった。その動揺は庶民の間だけでなく、支配階級の武士階級の間にもあって、彼らは従来の「戦士」の役割を失ってしまったが、次に武士階級はどこへ向かうべきかが判らず先が見えない不安な思いに動揺していたのだ。その時期に浪士たちは武士がもともと持っていた主君の仇を討つ「戦士」の志をみせて、新しい武士道いわゆる「士道」を眼前に見て、大方の武士は胸をなでおろさせようと図ったと考えられる。

---

<sup>28</sup> 大道寺友山は「武道初心集」で、「武士道に二法四段の仔細有之候。二法とは常法、変法に候。常法のうちに士法、兵法あり。変法のうちに軍法、戦法有りて、都合四段に候」と言っている。ここで士法とは武士の日常的ディテールにわたる行儀作法、兵法とは闘争のための武技、武芸の訓練を指す。治世の時代にはこの二段の修業をすれば十分だが、武士はもともと非常事態を前提にした存在だから変法（軍法、戦法のこと）も大事なことで、と述べている。彼は武士道から士道への過渡期を象徴する人とみることができる。

第二は「太平記読み」の流行とそれによる幕府に対するご政道批判である。

「平家物語」の精神が仏教による因果応報を主題にしているのに対して、「太平記」は儒教による君臣の名分を強調している。「太平記」は、冒頭で優れた君主（天皇）は天の徳（君主が守るべき帝道）を身に着けて国家を治める。他方、優れた臣下は地の道（臣下が守るべき臣道）に従って国家を守る。もし君主に天の徳が欠けると、帝位にいてもそれを維持できない。臣下が地の道から外れた行いをすると、権威によってもそれを保持することはできない。歴史を振り返ると、南北朝時代に活躍した後醍醐天皇は君主の持つべき徳に背き、北条高時は臣下の持つべき礼に欠けていた。そのために国家は戦乱に陥って戦乱の時代が40数年も続いた、と述べている（「太平記」巻1）。この「太平記」は、はじめは大名たちが儒者たちから夜伽話として聞かされて（「太平記読み」）、上級武士の政治学として勉強した。そこで儒学者たちが使ったテキストが「太平記評判秘伝理尽抄」だった。しかし、はじめは限られた人々だけが独占していた「秘伝」も、元禄のころになると下層の講釈師が庶民へ語るようになって「太平記」が広く普及した。

講釈師による「太平記読み」では、君主の上に公（国家）があり、民も君主も公に忠孝を尽くす必要がある、君主も儒教、仏教などの学問にとらわれず忠義や仁政に尽くすべきと教えた。これを忠臣蔵との関連で見ると、仇討は儒教にもとづいて「名分」を重視する幕府の法では禁止行為だったが、庶民の間では大石内蔵助の仇討ちは「忠義心」の表れで主君の恨みを復讐した「武士の鑑」で、大石は楠正成の再来として賞賛された。また、殉死も幕府の法では禁止されたが、「非正当な人々」が起こした正当性（名分）を超える活躍が「武士の鑑」として賞賛された。ここには、山鹿素行らの儒教にもとづく「名分」を重視した「近世武士道」にも収まりきらない独特な道徳観を見ることができる。このように忠孝や殉死を尊重する思想は、当時の「近世武士道」を超える新しい「武士道」観で、武士は「戦士」であるが、その武士は主君に尽くすが、「君主」は庶民に対しては仁政に、君主の上位にある「公」（=国家）にも忠義を尽くす必要があると考えて、国の体制、制度に縛られない日本人特有な忠義心となった。この考え方は、幕末の尊王攘夷の志士たちの心性にも通じるものがあって、幕末の志士たちに力を与えて明治維新の原動力の一つになった。こうしてみると、「太平記読み」はその後の日本人の思想に大きな影響を与えていることが判る。

### （忠臣蔵と「武士道」）

忠臣蔵は、大星を南北朝時代の楠正成の再来とし、赤穂浪士を元禄時代の天下泰平の世に現われた戦国の「戦士」になぞらえた。彼らが起こした主君の仇討ちは忠義心に基づく行動で、大願成就したのち義士は切腹して潔く死んでいくことに庶民は喝采を送った。その赤穂浪士の行為は、一見すると「戦国武士道」の形をとっているが、よく見ると彼らの行動を深い心の底で突き動かしている動機は「仇討」で、奉公人としての武士の道徳である

「近世武士道」に基づいた行動になっていることが判る。そうすると「仮名手本忠臣蔵」は武士階級の間で「戦国武士道」が頹廃し、「近世武士道」が新しい武士の道徳として登場する直前の段階で、新しい「近世武士道」観を先駆けて示そうとしたドラマだったとみることができる。

佐賀鍋島藩士だった山本常朝があのか「葉隠」を書いて、前時代の「戦国武士道」を世に提案したのは徳川中期の1716年頃である。彼は、忠義心は頭の中であれこれ考えるものでなく行動であらわすもので、しかもその行動は「死狂い（無我夢中）」でなければならないと主張する。そこには赤穂事件に言及して、主君が切腹した後すぐ仇討ちしなかったことや討入後浪士達がすぐに切腹しなかったことを落ち度だったと批判している。どうしてかという、すぐに行動を起こさなければ、吉良義央が病死してしまい、仇を討つ機会が無くなる恐れがあるからだ。そうってしまったのは、上方の人には知恵があるため、人から褒められるやり方は上手だけれど、「長崎喧嘩」<sup>29</sup>のように無分別に相手に突っかかることはできなかったためだ、という。「葉隠」からみると、赤穂事件は、新しい「武士道」の必要条件は満たしているが、まだ十分条件には欠ける点があったというのだろう。

山鹿素行の「近世武士道」論が登場して天下泰平時代における武士の役割が、「仮名手本忠臣蔵」が示す忠義の物語と整合性がとれていることを見て、庶民はこれが新しい時代の「武士道」なんだと胸がすく思いを持ったのだろうと思われる。

---

<sup>29</sup>「深堀義士伝」ともいう。1701年長崎で、佐賀鍋島藩士が屋敷へ帰る途中、つまずいてはねた土が長崎役人にかかった。言い合いになったが藩士が不調法を詫びてその場は収まった。しかしその日の夕方、長崎役人側の二十数名が藩士の深堀屋敷に押し掛けて乱暴を働いた。このため、藩士は、翌朝、長崎役人の屋敷へ討入り、6名を討った。鍋島藩士2名は割腹したが、幕府は、双方に死罪、遠島の処分をした。「武士道とは死ぬ事と見付けたり」の葉隠の教條を何のためらいもなく決行した見本として「葉隠」で賞賛された。

## 第7章 結語

今回の検討で、忠臣蔵はそれが置かれた時代に応じて解釈上 3 回の大きな変化があったことが判った。江戸時代と明治時代、そして昭和（戦後）時代である。江戸時代の忠臣蔵は退廃する武士階級と次第に経済力をつけ始めた町民階級との軋轢が強まる中で、忠臣蔵は町人階級の目線からサムライが有すべき「忠臣義士の物語」として読まれてきた。明治時代になると、武士階級そのものが消滅して代わりに天皇制国家づくりが進むと「忠君愛国の物語」として読まれるようになった。さらに先の戦争以降今日では、個人主義の隆盛を反映して個々の義士の人間ドラマとして読まれるようになっている。

### (1) 忠孝倫理の変遷

武士道の大本には、忠孝倫理をどのように考えるかがいつも横たわっている。中国から伝わった儒教思想の根幹にかかわる問題だが、もともと日中間の違いがあり、日本国内でも時代に応じて考え方に違いがあった。

中国の儒教の君臣倫理は、それは相互に義務を課すものだった。「君君たらざれば、臣臣たらず」だった。さらに孟子は「君の臣を見ること土芥の如くなれば、臣の君を見ること仇敵のごとし」とも言っている。それが後年儒教が中国の支配思想になり法華思想と癒着していくと、「君君たらずとも、臣臣たらざるべからず」というようにモラルが強調されていく。この儒教の名分論が日本に流入すると、前者の相互性が消えて後者の絶対的恭順性が支配的になる。

同じように、忠孝倫理にも日中の違いが生じている。中国儒教では、君臣父子の倫理では孝が基礎で忠は孝の土台に立つ上層建築である。この孝が忠の元という考え方は、君主関係は選択できるが親子関係は選択できないのでより本源的とする考え方によっている。ところが日本では、同じように孝が忠の元というのだが、実はより本源的なものは忠で、家はそのモラルを習得するための学校だと考えている。これを具体的に考えてみると、中国では父が政治犯罪を犯した時には、父は子のために隠し、子は父のために隠するのが当然と考える。孝第一主義の立場に立つので、父の犯罪をお上に密告するなどということは考えられない事態である。ところが日本では、「大義親を殺す」というように、主君への忠が最優先なので、そのために愛する子供でさえも犠牲に供さねばならないと考える。

日本における忠の絶対的優位性と忠臣は二君に仕えずという名分論的モラルが重なると、一方でどうしても主君の元を去るわけにいかないということで家臣に主君へ対する忠誠義務を一層押しつけるが、他方で君主の命令にただ屈して従うのは真の忠ではない、残された道は君を真に正しい君にするために執拗に働きかけるしかないと考えるようになる。君の誤りを正すための諫言が臣の道という考え方（「諫争の忠」）自体は中国思想によるものだったが、中国のばあいには「三諫して聴かざれば去る」という態度が結びついていたので容易に実行できたが、日本の場合二君に仕えるわけにいかないの、君主へ隷属して絶体絶命の立場へ追いやられることになる。主君の家来になった武士は門閥制度の下で、先祖代々家老は家老、足輕は足輕として主君に勤めることが決められて、その分に応じた奉公人になっている。

## (2) サムライを典型的日本人像にした忠臣蔵

ある人を典型的日本人と言って誉める場合に「あの人はなかなかのサムライ」ということがある。イギリスの「ジェントルマン」、フランスの「シトワイアン」、アメリカの「コモン・マン」というように、それぞれの国に典型的人間像がある。日本の場合でそれに当たるのが「サムライ」だろう。

今日の日本でも、よく「サムライ」が賛美される。そうした話を聞く場合、我々は、江戸時代までの武士は明治維新で廃止されたので、彼らの精神的基盤だった「近世武士道」もまた廃止されていることも併せて思い出さねばならない。特にスポーツの世界で「サムライジャパン」「サムライブルー」などが使われているが、それは武士道に基づき主君に対しては死をも辞さない服従心を持ちながら、勇猛果敢でフェアプレーの精神を持つ人、温和で果敢な性格の人を意味するようである。西洋における中世の騎士も、主君への無条件な服従心、家柄尊重、言葉が強い拘束力を持ち、勇敢で温和、神と婦人に対して *gallantry*（親切心）を有する湯館で温和な戦士である。だから、高い精神性をもつサムライは中世の騎士に匹敵し、サムライはジェントルマン、シトワイアン、コモン・マンと並んで日本を代表する典型的人間像になっている、というのである。

しかし、この美化された「武士道」観は、結局明治以降、新渡戸によって作られた拝金主義、唯物論、個人主義に対するアンチテーゼとしての「近代武士道」にすぎない。その「近代武士道」が日清、日露、日中の戦争が続くたびに広められて軍国主義を支える道徳観になり、江戸時代の武士階級の道徳が日本人全体の道徳にすり替えられた歴史を持つことを思いだす必要がある。

同様に、日本経済史をみると、江戸時代に日本の町人階級は江戸や大阪、京都であれほど

の富を蓄積して栄華を誇ったのに、近代になって日本資本主義が発展するようになって、ついにブルジョアジーとして自前の典型的人間像を打ち出せなかったことを発見する。

欧米の先進諸国と違って、典型的日本人像が商人あるいは産業人でなかったのは、日本の商人がもった「町人根性」のせいだろうと福沢諭吉が言っている<sup>30</sup>。日本の商人たちは、儲けのために手段を選ばず、破廉恥な利益追求に走る「町人根性」を繰り返したために、ついには国産品の信用を落として長期にわたり大きな利益を失ってきたためではないかというのである。江戸時代に商人が士農工商の身分体系の最低辺に置かれ続けたことが商人にひねくれ根性を植え付けたのも一因かもしれない。西洋では財力をつけた資本家が次の資本主義時代を自前で作り出してきたのに、日本の場合には政治権力に寄生する「政商」がその代りの役を果たしてきた。それに気付いた福沢は、儲け本位の町人根性を捨てたしっかりした商人を育てることが重要で、そのためには「士魂」の注入が必要だと考えていた。

福沢のいう「士魂」は、「身に前垂れをまとうとも、心の内には兜を着ていることを忘れないようにせよ」と言うもので、武士の知識性と道徳性とを経済面に活用しようというのがこの言葉の意味である。士農工商の江戸時代、商は卑しいものであった。しかし明治時代になって、武士であった者でも商売を貴いものと考えようになり、一定のルールの下で武士の魂を忘れず、利潤の追求を求める。福沢諭吉はそういう人材の育成に努めたのだ。

1989年にバブルがはじけて始まった「失われた20年」の最中に、「日本的経営」という言葉がよく使われた。高度経済成長を支えてきた日本企業にみられた特徴的な経営慣行を指した言葉である。それは大企業によくみられたもので、終身雇用、年功序列、集団のボトムアップによる意思決定などの点が米国式経営スタイルと大きく異なるという指摘である。

「日本的経営」をよくみると、忠臣蔵の構造と日本の企業社会の構造がよく似ていることに気が付くだろう。

第一に集団の力で事を成し遂げていくこと、  
第二に終身雇用の企業一家で、社員の忠誠心を競い合わせて士気高揚を図ること、  
第三に表の顔と裏の顔を器用に使い分けて、裏の顔で密かに賄賂を渡して相手の機嫌を直し、トラブルを解決しようとする調整型の人間の活躍、

などは時代を超えても日本人に共通する心的特性のように思われる。

「仮名手本忠臣蔵」は、大星由良之助をトップにして赤穂浪士46名が集団で一家の忠誠心

---

<sup>30</sup> 福沢諭吉「文明論之概略」（岩波文庫、M8年）

を根拠にして仇討ちを果たした。これを今風に言えば、社長が喧嘩して一方的に責任をかぶって殺されて会社が倒産する、そこにいた社員たちは仕事を失い給与も得られなくなったが、お互いに支え合って死んだ社長の弔い合戦をして最後にサラリーマンの鑑として人々から称賛を受ける話というように読み替えられる。それだけでなく、加古川本蔵は主君桃井若狭之助の懐刀だが、主君が高師直とトラブルを起こすと、主君には憎い思いをそのまま師直にぶつけなさいといいつつ、裏で師直に多額の賄賂を渡して師直に心変わりをさせてしまう、という調整役を果たしているようにみえる。

このように今の我々の身の回りを眺めてみても、忠臣蔵の影響があちこちに残されていることが判る。現代に残されている忠臣蔵の影響に気付くたびに、忠臣蔵は何度でも読み直して新たな発見をさせてくれる本である。